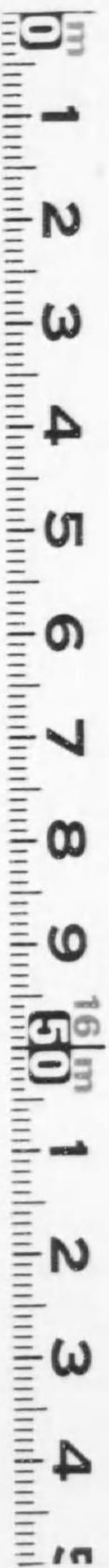
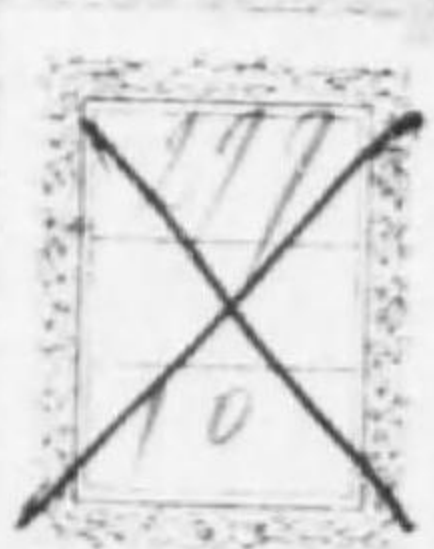


罪つみ

八嶋
幡川
白七
帆石
畫作

(後編)

大阪 樋口隆文館藏版



始





特116
586



(後
編)

八嶋
幡川
白七
帆石
畫作

大正
3. 10. 20
内交



■ 次目説小刊新館文隆口樋 ■

同	同	同	同	和	同	同	伊	嶋	同	同	同	羽	同	同	同	同	同	渡
				田			藤	村				棟						邊
				天			銀	抱				荷						默
				華			月	月				香						禪
				作			作	譯				作						作

戀浪二弱靜予怒出其武命電男風七封女怪千
 のま人 意くの 地ら女人子 濤潮女系 薩伎窟子怪子
 き の士 流首 人獅の枝 菩藝

の大多てに上紙聞新の地各四東は物版出の館文隆口樋
 い白面極至もてん讀をれど付に物るたし博を評好



浪人の女
戀の意氣地
まくら



罪 (後編)

島川七石

(一)

藤井玉子の心の奥を讀んだ竹子は、何んもなく親しき友では在りながら嫌惡の情が起つたが、一面から考へれば玉子の様な快活な、さうして正直な婦人は自己を信するやうに他をも信じるのが常であるから、今度のやうな事があるとい圖に他を怨むは無理がないと勢から同情をするのであつた。

後編

(1)

「あらッ何處へ行らつしやるの……」
俄に自分を置いて、玉子が暗の彼方へ駆けて行つたので竹子は呆氣に取られて居ると遂に其の姿は掻き消へてしまつた。

「本當に藤井さんはどうしたのだらう」

餘り突飛な行爲に竹子も今は少しく薄氣味悪くなつて來た。

「是れは餘程用心をして御交際をしないと飛んだ迷惑をする……」

と、氣が付いた竹子は、此の儘歸路に就かうとしたが些さか躊躇して、我れにもあらず帝都劇場の方を眺めて居た。

「竹子さん、本當に失禮をしたわねえ」

何時しか戻つて來た玉子は、斯ういつて竹子の前に頭を下げた

「あら藤井さん、何處へ行らつしやつたの、妾しは驚いて居たのよ」

ニコッ笑つた玉子は、

「實は竹子さん、此の先きを讓さんが通りましたから此處へ呼んで來てウツと油を取つて上げやうと思つたのよ」

「あらまア、随分だわねえ、さうして殿村さんの兄いさんはどう遊ばして」

玉子は一寸後れ毛を掻き上げ乍ら。

「處が竹子さん、妾し少しも氣が付かなかつたらお父う様と御一緒でしたから残念ながら退却して來たよ」

と、ケロリとして居る、竹子も今は可笑しさを堪へて。

「夫れは残念でしたわねえ、夫れでは徐ろく出掛けませう」

「え、参りませう……」

と、二人が起ち上ると彼方から急ぎ足で近付いて來た若い洋服

妾の一人の紳士が竹子の前に立つて。

「おう貴女は竹子さん……」

と、葉捲きの煙りを輪に吹きながら聲を掛けた、自分の名を呼ばれたので。

「はい……」

と、返辭をして其の紳士の面を仰いだ竹子は、忽ち顔の色を變へて。

(4)

「あらッ田村さん……」

悪い男に逢つたと竹子は當惑らしい様子であつた、そんな事に頓着の無い田村は微笑を浮べながら。

「竹子さん、宜い處でお目に掛りましたなア」

と、云ひ乍ら傍なる玉子に眼を移し

「おや御同伴が在らつしやいますね」

竹子は何んとかして田村と別れやうと思つたので。

「え、同級の方で御在います」

「お、左様ですか、貴女如何です僕は是れから竹子さんと帝劇へ行かうと思ひますが、お差支が無くば御同行なさいませんか」

竹子は是れを聴くと慌て、

「田村さん、妾しはモウ是れから我家へ歸るのですから失禮しますよ」

(5)

と、玉子と共に立ち掛ると、玉子は早くも竹子が自分が居るのが邪魔になるのであらうと思つたので。

「折角でございますが妾しは是れから京橋へ参るやうがありますから此處でお別れ致します」

ど、行き掛けるので竹子は。

「お待ち遊ばせよ、玉子さん妾しも御一緒に行きますから」

「ホ、ホ、可いでは在りませんか竹子さん、妾しは友人の秘密は

堅く守るわ」

何處までも妙な方に考へを走らして、竹子の留める手を振り拂

つて行き過ぎたが小走りに戻つて来た、竹子の耳許に口を寄せ。

「本山さんお楽しみ……ハスバンドに宜しく仰しやつて下さい」

ど、云ひ置いて亦た駆け出した

「あらッ藤井さん……」

竹子は面を真赤にして一緒に駆け出さうとするど。

「まアお待ちなさい……」

ど、田村は力を籠めて竹子の片袖を捉へた。

(一一)

親しき友の藤井玉子が、自分と田村の間を妙に誤解し、萬事を呑み込み顔に此の場を外してしまつたのが、竹子に取つては何よりも辛らかつた。

「玉子さん、貴女何か誤解して居らつしやるわ、御一緒に参りますから待つて頂戴よ」

ど、身を悶へたが其の人は既に何れへか姿を隠くして、自分の片袖を捉へて居る田村が物凄く笑みを浮かべて居るのであつた。

「竹子さん、イヤ合縁何をさう慌て、居らつしやるのです、僕は何も貴女に對して理不盡の真似をしやうといふのでは在りません」

「夫れは判つて居ます、然かし田村さん妾しが用事が在るから歸宅しやうと申して居るのに貴郎が無理にお留めなさる事は無いでせう、第一妾しの友人は貴郎と妾しの間を曲解して此場を去つたではございませんか」

と、叫んだ竹子の聲は鋭かつた、すると田村は尙ほもニヤ／＼笑つて、

「夫れは御迷惑でした、然し令嬢僕は今晚貴女に御面會したのを好機會として一言御聴きに入れ度い事があるのですから其の邊まで一緒に御散歩をなすつて下さいませかん」

虫の好かぬ田村から斯ういはれた竹子は一言の下に。

「折角ですが貴郎と同行する事などは出来ませんから御用がありませぬら郎へお入來下さいまし」

「ハ、ハ、却々剛情ですな……」

と、何か考へて居た田村は、暗の彼方を見透して。

「あッ、令嬢彼處へ新聞記者の友人達が三四名來ます、貴女と此處に居て詰らぬ誤解を受けて三面種を作るのは愚の極ですから此方へ隠れませう」

斯う云はれると、竹子は大に慌てゝ。

「あらッ左様ですか……」

と、無意識に田村と共に其の場を離れると、彼れは人の目に附かぬ暗の樹の間に竹子を連れ込み。

「此處なら誰れの目にも留りません」と、薄氣味の悪い笑みを洩し。

「竹子さん、僕は物を婉曲に云ふ事が出来ませんから赤裸々に申

し上げますが僕から申し込んだ結婚問題は……」

後ごを語らんとすると竹子はこれを遮つて。

「其の事なら私しは母の許までお断り申してあります」

先刻から重ねくの無禮に怒り心頭に發して居る竹子がキツパ

リいつて退けると戀に常識を失つて居る田村が、

「お嬢さん、夫れは餘り情け無いでは在りませんか、僕は貴女の

爲めなら此命まで差し上げやうと思つて居るのですよ」

と、云ひ乍ら矢庭に右の手を竹子の肩へ掛けて暴力に訴へて接

吻を迫つた。

「あれ……ッ……」

絶對絶命の場合となつたので竹子が思はず聲を立て救を求め

る。

「何故そんな大きな聲を出すのです、僕は貴女に對して是れ程に

思つて居るのにどうしてさう冷淡なのです、決して悪い事をする

のではありませんから少し我慢をなさい」

と、手早く取り出したハンカチを竹子の芳唇に當てた、折り柄

膏後の木下圖から現れた一人の男が。

「こらッ何をするッ……」

と、叫んで田村の利き腕をグツと捻ち上げた、开も此の男は何

者であらう。

(三)

不意に現れた男から力任せに其手を捻ち上げられると、流石の

田村も痛さに堪へ兼ねて。

「あッ痛ッ……」

と、叫んで竹子を捉へた手を離した、危き處を免れ得た竹子は恐ろしさに身を震はして傍に少なくなつて立ち忪くむと、彼の男は。

「キ……貴様は何者だ……」

相手の面を覗き込み乍ら勢ひ鋭く田村に向つて誰何した、すると彼れは痛さを耐へ乍ら。

「僕を訊すより君こそ一体何者だ、他人に對して無禮では無いか

「何にッ……」

と、此の男は田村を突き放して。

「何が無禮だ、僕は此處に居られる婦人が救を求められたからお

助け申したのだ近頃此の公園には不良學生が多く出沒する噂があるが、打ち見た處では貴様は相當の風采をして居りながら、何んといふ醜態を演じたのだ、今夜は特別を以て見逃して遣るからサッさと歸れッ、夫れとも何か云ひ分があるなら出る處へ出て理非曲直を分けるぞ」

年こそ若いがこの青年のいふ言葉には寸分の隙も無い。

「成程、理由を知らんけれど僕を何か不逞の徒と思ふだらふが僕はそんな者では無いぞ、其處に居る婦人の同行者なのだから詰らぬ真似をすると承知せんぞ」

田村は未だ擬勢を張つて此の場を去らうとする氣色が無い。

「何にッ此の婦人の同行者だ」

と、彼の青年は一寸小首傾けて、苦が／＼しい笑みを浮べ。

「夫れでは貴女は此の人とお連れなのですか、さうして斯んな處へ入つて来たのですか」

と、暗を透して竹子を顧る。

「いゝえ……」

と、耻かしさうに前に出て来た竹子は。

「危い場合をお助け下さいまして誠に有難うございます、成程此のお方は妾しの邸へ出入は致して居りますが、決して一緒に参つたのではございません、實は妾しが今日お友達の處へ遊びに参りまして唯今此處まで戻つて参りますと此の先でお目に掛つたのでございます、さう致しますと良い加減な口實を設けて妾くしを斯んな處へ連れて参りまして、既に無能の真似を致さうと致しますからお救いを求めたのでございます」

「おう左様ですか、愈々怪しからん奴だ、一体貴様は何處の奴だと、彼の青年が再び詰問を開始すると、形勢我れに不利なりと見て取れた田村は、物をもいはずに其の場から逃げ出してしまつた其の後しる姿を見送つた彼の青年は大口を開いて笑い出し。

「ハ、ハ、ハ、流石に幾分か良心が在ると見えて逃げて行きました、兎に角貴女の御無事で在つたのが何によりです、さアお送り申しますが貴女のお住居は何處ですか」

「はい有難うございます、其處へ出ますれば電車で戻りますが、實は妾しは紀尾井町でございます」

彼の青年は一寸考へて居たが。

「おう左様ですか、夫れでは直き近所ですかから僕の懸念な車宿からお送りさせる事に致します、さうして紀尾井町は何の邊です本

山形縣の屋敷の近所ですか」

我が家の事をいはれてハッとして胸を轟かした竹子は再び町中に頭を下げる。

「仰その本山が表しの名でございます」

「えッ……」

と、驚いた後の青年は電燈の光りに竹子の面をチッと眺める。

「夫れでは我々のお名前は何つて居りますが貴女は竹子さんでござ

いますか……」

(四)

我が身の危急を救つて呉れた此恩人が、自分の名前を知つて居たのには流石の竹子も唯だ驚くばかりであつた。

「どうして美しくしの名前を御存じで居らつしやるのでございます」

竹子は斯ういつて薄気味悪るさうに此の青年の面を熟視すると

堅く緊つた口許にはいひ知れの愛嬌を漂へて、然かも濃い一の字

眉毛と、張りの在る黒目勝ちの双眼は真に威有つて猛からざる眉

目清秀の好紳士であつた。

「僕は仔細あつて能く貴女の事を知つて居ます、然かし竹子さん

の危き場合をお救い申したのは真に奇遇でしたなァ」

と、彼の青年は一人で合點して居たが。

「竹子さんといふ事が判つてはお一人で御歸へし申す事は出来ま

せんからお屋敷までお送り申しませう」

「有難うございます、然かし甚だ失禮でございますが、遂にお見
外れ申して居りまして何共申し譯けがございません」

と、竹子は耻かしさうに頭を下げると。

「御尤もです、實は僕も貴女のお名前は豫てから伺つて居ります
がお目に掛るのは今夜が初めなのです」

「おや左様でございますか、さう致して貴郎様は失禮ながら誰何
様でございますか、お差支が無くばせめてお名前だけ」

竹子は何故か此の時胸中に一種異様の感を抱いたので斯ういつ
て耻かしさうに質問を發した。

「ハ、大變六ヶ敷くなりましたなア、實を申せば僕は殿村咲子
の兄ですよ、常に妹の奴が貴女のお世話にばかりなつて居ると口
癖のやうにお噂をして居りますので自然と貴女のお名前が僕のや

うな無神経の奴に記憶に残つて居るのです」

と、ニココリ笑つた、夫れと知つては竹子も急に耻かしくなつ
て、

「夫れでは咲子さまのお兄い様の讓様で在らつしやいますか」

と、竹子は何故か美しき面を真赤にしたのである、さうして忽
ち此の人こそ彼の藤井玉子の意中の人であるかと思へば、玉子の
戀ひ慕ふのも無理ならぬこと、首肯された。

「竹子さん夫れでは餘り遅くならん中にお送り申しませう、第一
今夜萬一のことでも在つた時には僕の家でも大なる責任が在るの
ですからなア、何にしても僕が貴女をお助け申したのは僕や妹の
身を取つては誠に嬉しいのです」

と、欣然として居る、さうして其の言葉付きから察すると、今

日殿村の家で合奏の在つたのを知つて居るらしいのに何んで不在であつたのかと其の理由が竹子に解することが出来なかつた。

「夫れではお言葉に甘へまして御同行を願います」

「承知しました」

と、讓が客待の腕車を呼ぼうとする。

「あらもし……」

慌て、制止した竹子が。

「實は貴郎のお邸へ伺いまして、非常に御馳走になつて居ります處へ唯今の出来事で何んだか非常に頭の痛みを覺えますから御迷惑でも二三町丈け散歩して参り度う御座います……」

「あ、左様ですか、夫れでは御同行しませう、實は尾籠の話ですが、僕も今夜は西洋料理を喰い過ぎて胸苦しいのですから散歩

の方は大賛成です」
と、日比谷公園を後に二人が歩き出すと、今まで何處に隠れて居たのか彼の田村が足音を盗んで其背後から尾行した。

(五)

二人は日比谷公園の正門を出ると、互に手を執らんばかりに寄り添つて、外濠の電車線路を參謀本部の方へ歩みを移した、さうして神ならぬ身の背後から田村が尾行して來るなどは夢にも知らなかつた。

「本山さん……」

と、聲を掛け、殿村讓は何かいひ度い風であつたが、

「嘘、今夜は驚いたでせうねえ」

と、話頭を脇に外らしてしまつた。

「はい、貴郎様が折り能くお通り下され無ければ妾しは終生拭ふ事の出来ぬ汚辱を受けたので御座います」

今更ら乍ら此の人の爲めに大難を免れ得たのを喜んで、竹子は再び頭を下げた。

「さうお禮を仰しやられると却つて恐縮します、假令僕がお救い申さんでも大能の神は何人かの手に依つて貴女をお救ひするのですよ」

「でも妾くしは咲子様のお兄い様がお助け下さいましたのが此の上も無く嬉しいのでございます」

「は、は、要するに奇縁といふのですなア……」

と、何氣無くいつた、が若き二人の胸の中には此の時不思議にも無形の念に囚はれたのか期せずして互の面を見合つた。

「ねえ竹子さん……」

と、再び相手呼び掛けた殿村は。

「是れを御縁として將來とも御交際を願います、夫れに妹の奴は御懇意なのですから妹同様にごうか長く御交際を願ひ度いのです」

竹子は斯う云はれると嬉しさうに。

「夫れは妾しからお願ひ申す事でございます、此の後ちとも妾くしのやうな者でも何かとお心添を願ひます」

と、漸く是れだけいひ得た竹子は、高まる胸の動氣を押へるやうにして、何心なく空を仰いだ、すると自分からか夫れとも譲から先きに出したのか知らぬが何時の時に二人は握手をして居た

ハッと思つた竹子は之れを振り放さうと思つたが何故か夫れを断
行し得ないで居ると。

「竹子さん餘り遅くなるからお宅で御心配をなさるのでせうから此
の邊から腕車で行かうでは在りませんか」

と、讓は其の手を放した。

「はい……」

竹子は讓の言葉に従つて、男の呼んだ腕車に乗つた、芝の中空
に當つて萬朶の櫻と咲き千條の柳と垂れる煙火は外務大臣の催す
大夜會が今しも酣である事が首肯された。

「竹子さん……」

と、後しろの車から聲を掛けた讓は。

「あのお邸は此の邊でしたな」

「はい、此の先の角を曲りますと直ぐでございます」

「夫れでは此處で降りませう」

竹子は云はるゝまゝに腕車を降りて。

「本當に飛んだ御迷惑を掛けまして相済みません」

「どうしまして」

と、軽く返辭をした讓は、彼の日比谷で竹子に迫つた男が本山
邸へ出入する男であるからには、何者であるかを確かめたかつたが
夫れを云ひ出し得ぬ中に本山邸の門前に着してしまつた。

「おやッ……」

何に驚いたか竹子は化石の如く立ち慄んでしまつた。

「どうしたのです竹子さん」

と、讓も怪訝の面をしたが初めて夫れと知つて。

「おうモウお眠みになつて居るのですね馬鹿に早いですなア」
左まで夜は更けて居ないのに男爵邸では早や表門を嚴重に閉鎖
て眠りに就いて居た。

「一寸御免下さいまし……モシ一寸……御免下さい……」

と、聲を掛けても返辭が無いので、讓は門柱の呼鈴を押して見
たが依然として誰れも出て來る氣配が無い。

(六)

訪れた聲が奥に通じないばかりか、門柱の呼鈴を押しても誰れ
も是れに應ずる者が無い。

「如何したのでせう本山さん……」

と、讓は心配らしい面を上げた。

「左様でございますねえ、まだ眠む時間ではございませんのに」

竹子も今は頗る不安の念に襲はれたらしい様子である、すると
門内から。

「誰れです、姉さんですか……」

と、聲を掛けたのは弟の敏雄であつた。

「さうよ、敏さん一寸開けて頂戴……」

「待つて下さい、直ぐに開けますから」

玄關番の書生は狸寝でもして居たと見えて敏雄は、意勢よく門
を開け乍ら。

「姉さん大變遅かつたのねえ、殿村さんのお邸から午過ぎに電話
が掛りましたが餘り遅いから先刻聞き合したらもう歸つたといふ

返辭なので大變心配して居ましたよ」

と、云つて姉を門内へ入れやうと思ふと見馴れぬ男が立つて居るので。

「姉さん此のお方は……？」

敏雄は怪訝の面をして譲を眺めた。

「あのお方は殿村様の若様よ、實は妾しが途中で悪い奴の爲めに、既に大なる汚辱を受けやうとしたのを、此のお方の爲に救つて頂いたばかりか斯うして送つて頂いたの……」

と、竹子がニッコリ笑ふと。

「おう左様ですか、僕は本山敏雄です、姉が大變お世話になりましたさうで誠に有難うございます」

敏雄は叮嚀に一禮した後ち。

「兎に角兩親も在邸して居りますから一寸お通り下さいまし」

と、促された譲は軽く首肯して。

「夜陰に反つて御迷惑です實は途中で令嬢が危難に逢はれる處を折り好く通行したものです……兎に角夜が遅くなつて居ますから一寸男爵なり夫人になり令嬢の御歸宅が遅れた理由を申し上げてお暇を致しませう」

「御親切に有難うございます」

と、玄關に駆け込んだ敏雄は寝て居る書生を起して譲を一寸應接室へ案内したが改めて奥へ通して兩親に引合はすと、男爵は譲から今夜の出来事を聞いて非常に喜び。

「イヤ非常なお世話になりました、改めて明日はお邸へ御禮に伺います」

傍に坐つて居た浪子夫人は、チツと竹子の面を睨めて居たが、主人を差し置いて口出しが出来ないので。

「本當に大變お世話様になりましたして有難うございます」

と、共に禮は述べるもの、何んとなく其の態度は冷やかであつた。

「夫れでは僕は失禮致します」

「どうぞ子爵に宜敷く仰しやつて下さいまし」

と、本山男爵は歸つて行く讓を態々玄關口まで送り出した後ち奥へ戻つて来て。

「竹子、本當に危い目に逢つたなア、然かし殿村君に助けて貰つたのは本當にお前の幸福だつたね」

と、男爵は我娘の危き難を免れて無事であつたのを喜んで居た

が。

「俺しも唯つた今歸つたばかりだがお前が歸らないといふので本當に案じて居たよ、何により無事で良かった」

男爵の心から嬉しさに引替へて浪子夫人はニヤ／＼笑い乍ら

「竹子さん、お前はそれだ狂言を書いて親の目を眩ます心算だね」

と、云ひ乍ら竹子の前に詰め寄つた。

(七)

浪子夫人の此の一言には、竹子は勿論父の男爵も呆氣に取られて。

「浪子、何んだつてそんな愚にも付かぬ事をいふのだ、殿村君が彼の通り竹子を連れて来て、今夜の出来事を仔細話して行つたではないか、どうもお前は物事を曲解して不可ん」

すると浪子夫人は冷やかな笑みを浮かべ。

「成程御前様の仰しやる事は一應の道理でございますが、だつて可笑しいでは有りませんか」

「何が……」

「何がと仰しやつて、竹子が何んな者に危害を加へられやうとしたか知りませんが誂へたやうにアノ殿村さんが救つて下さるなんて……餘り仕事が無味ではございませんか」

と、口汚く男爵の言葉を打ち消し。

「竹子さん、お前さんは何故殿村さんから直ぐと腕車で歸らなか

つたのです、實は、先刻お前の戻りが遅いから殿村さんへ電話を掛けて伺つて見たのだよ、さうすると皆さんと一緒に歸つたといふから小石川の富隆さんや新宿の磯島さんへ電話でお前の事を聞いて見たのですよ、さうするとお前さんはアの藤井さんと一緒に日比谷で皆さんと別れて何處へか行つたといふでは無いか」

「はい……」

と、兩手を突いた竹子は。

「妾くしは宅が近いものですから電車で歸らうと思ひましたので、さうすると妾しを呼ぶ者がございまして其の者が妾しに危害を加へやうとしたのを恰度通り掛りましたアノ殿村さんに助けて頂きましたのでございます」

「さうしてお前さんに何か危害を加へやうとしたのは何處の誰れ

だか特らないのかい」

竹子は繼母から奇怪なる疑いを受けて居るので一層のこと相手は彼の田村で在ると打ち明けやうと思つたが、さうした時には繼母の實家方に關係の在る男の事であるから返つて父の前で面目を失するであらうと思つて。

「はい何處の者でございますか見馴れぬ書生なのでございます」

男爵は憐みを乞ふが如き竹子の様子を眺めて。

「モウ今夜の事は浪子も何も云ふな、兎に角無事であつて見れば結構だから」

と、口を切つたが尙ほ言葉を重ねて。

「然かし竹子もモウ年頃の事であるから世間から誤解を招くやうな事をして不可んせ」

「はい……」

「夫れでは妾しはモウ竹子の事には何にも干渉を致しませんからと、浪子夫人は何故か非常の不機嫌で自分の部屋へ入つてしまつた。

「……」

後と見送つた男爵は暫く腕を組んで何か考へて居たが。

「さう心配をせずに早く眠みなさい」

傍に泣き入る竹子を促しながら。

「母アさんは何時もあんな事をいふのが癖せなのだから心配をせんでも宜い」

「はい、誠に相済みません……」

と、竹子は父に向つて厚く禮を述べた後ち、不安の念を抱き乍

ら臥床に入つた。

(八)

翌朝になると一家は共に朝餐の食卓に就いた、浪子夫人は何故か苦り切て一言も發しないで竹子を睨み付けて居るばかりであつた。

「俺しは今日殿村子爵の處へ禮に行つて來るがお前も學校で殿村の令嬢に逢つたら良く禮を述べて置きなさい」

「はい申します」

竹子は繼母が不機嫌であるのに胸を痛めて前夜自分に侮辱を與へたのは彼の田村であると告げやうと思つたが。

「まア驚愕して遣りませう」

と、獨り胸中に潜せて、常の如く登校してしまつた。

恰度此の日の午後一時頃であつた麴町有樂町の日の出新聞社へ田村を訪れた男があつた。

「何んの用事だか聽いて見て呉れ」

聽いた事も無い男から面會を申し込まれた田村は前夜の事があるので些さか掛念して給仕に斯う命じた。

「田村さん、實は左様申したのですが實は或る秘密を貴郎へ報告に來たのださうです、さうして御面會をして下さらんければ他社へ知らせるさうです」

「何んだか知らんが兎に角應接へ通じて呉れ直ぐに逢ふから」
給仕は命せられたまゝ其の面會人を應接室へ通した、田村は面

會して見ると未だ一面識も無い男であるから妙に思い乍ら少しの油断も無く」

「僕は田村ですが足下は」

彼の男はチツと田村の面を覗めて。

「初めてお目に掛ります、私は高橋市之助と申しまして以前は大磯の本山邸に居りました者でございますが少々先生のお取に入りたい事がございまして参上致しました」

「おう貴女が高橋さんでしたか」

其の當時度は筆にした事があるので田村は何んで高橋が自分に面會を申し込んだのか判らなかつた。

「さうして何か御用でも在りますのか」

「え、……」

と、俄かに聲を潜めた高橋は。

「實は私も彼の事件が在りましてから本山家を何故か放逐されました困つて居るのですが就ては貴郎が令嬢と御結婚なさるさうですから良い材料を買つて頂かうと思つて参つたのです」

流石の田村も此の一言には面喰つた、高橋の口吻から察するとどうやら自分と竹子と結婚すると信じて幾らかの金を得やうとするらしい。

「然かし一寸待つて下さい、僕は竹子さんと結婚などはしませんよ」

高橋は田村の打ち消すのを期して居たと云はぬばかりに冷笑して。

「あら左様ですか、夫れでは貴郎と竹子さんと結婚するといふの

は唯だ贈さ丈けだつたのですか」
「成程一時はそんな相談も在つたのですが少し理由があつて中止しました」

「夫れでは例の秘密を御職掌柄でお突き留めになつたのですか」

「例の秘密といふと……」

田村は思はず釣り込まれると。

「ホ、ホ、御存知で居りながら……」

と、ニヤ／＼笑つた高橋は。

「尤も彼の事を聴きますと一寸厭やになりますなア、何にをいつても令嬢の大なる弱點ですから」

「えッ、令嬢の弱點……？」

田村は自分が利用されるとは知らずに、此の高橋が何か竹子の

秘密を押さへて居るのを聴き出し、浪子夫人を始め竹子に對する鬱憤を晴らさうとした、さうして時と場合に依つて再び結婚を迫る材料にしようと思つた。

(九)

田村は高橋の言葉を聴くと。

「高橋さん、一体どんな事です竹子さんの秘密といふのは」

「貴郎は御存知でないですか」

「實際知らんです」

「さうですか、夫れでは申し上げますが新聞に書けば大した種になるのですが貴郎は私しの申し上げる事を買つて下さいますか、

尤も新聞へお書きなさることも或は此の種を男爵へお賣りになることも貴郎の御勝手です」

「成程……」

田村は暫く考へて居たが。

「さうして貴郎は、私しの社で其の特種を買はぬ時は他社へお賣りですか」

「無論です……」

と、語尾に力を入れた高橋は。

「實は僕にも記者仲間にも三四の友人が在りますから、友人に話して良いのですが、貴郎は本山家には御關係の在るお方ですから一應御交渉に來たのです、買ふ買はんは貴郎の御勝手です」

「左様いはれると僕も非常に君の好意を買はんければならんねえ

兎に角社では斯んな事の御相談が仕憎いから一寸他所でませう仕澄したりと高橋は胸中に喜び。

「さうですか、夫れでは御同行ませう、兎に角意外の事件ですせ」

「さう賣り物に勿体を付け給ふな」

今は田村も高橋が自分が男爵家に手蔓があるので金にしやうとして居ると誤解をして言葉遣いも非常に碎けた、さうして二人は社の附近なる日比谷公園へ入つて松本樓の客となつた。

「さア飲み乍ら聽かう高橋君」

「さうませう」

と、高橋は容易に事件の口を切らなかつたが。

「田村さん、貴郎は竹子さんの身の上を知つて居るかね」

「身の上といつて、彼の婦人は本山男爵の先妻の子さ、君は夫れを今更らしくいふのかね」

「イヤ……」

と、手にせる盃を下に置いた高橋は。

「處で彼の令嬢の双兒といふ事を知つて居るかね」

「えッ竹子さんが双兒……？」

「左様です……」

「本當か君ッ……そうして其の姉妹はどうして居るのだらう」

「其の姉妹も立派に社會に立つて居るのだ、然かも世間に兎角の評は在るが帝都劇場の女優として人氣を背負て立つて居るんです

「えッ……竹子の姉妹が女優……？」

田村は呆氣に取られて明いた口が塞さがらなかつたが。

「アム驚いたなア、少しも知れなかつた夫れ丈け聽けば後は聽かなくも君の持つて居る種は買ふよ」

「さうか、夫れではお話しをしませう」

二人は日の暮れまで何かヒソ／＼語り合つて居たが別れる時の田村の面上には希望の色が輝いて居た。

「よしッ……一ッ無念晴らしをして遣らう」

彼れは高橋から竹子の素性を聽いて、戀の叶はぬ意趣晴らしを其紙上でしやうと覺悟したが。

「ウソ一層の事昨夜の野郎も……」

と、憎むべき田村は、筆の序に殿村讓を一ッ渦紋の中へ捲き込もうと決心した。

(十)

其の習朝の日の出新聞は、社會部面の冒頭へ一號活字を二段抜きで「秘密を包む墮落令嬢」といふ麗々しい題標で、可憐なる竹子の素性を書き立て、彼れの父本山利武が往年書生時代に、近縣へ旅行の途次特種部落の一美人と醜關係を結んだ罪の疑りで然かも夫れが双兒であつた、で、現に其の姉は目下女優として帝都劇場の舞臺に立つて居る松野露子である、と竹子が學生妻の寫眞と松野露子が舞臺姿の寫眞を並べて掲げたばかりか竹子は恐るべき女色魔で、嚴格なる家庭を厭つて常に幾多の青年と情交を續け、現に先き頃大磯の別荘に滞在在中も折柄避暑に來て居た青年と情交

を結んだ爲め大椿事を起したが、昨今は亦た他に情夫を求めて現に天長祝節の當夜の如きも日比谷公園に於て情夫と密會して居た爲め歸宅に遅れて、家に歸るや父母より非常なる折檻を受けたが其の情夫は、内務次官殿村子爵の長男讓といふ籍を帝大に置く、女蕩しであるといふ噂があるが、幾多貴紳の令嬢を教育する華族學院から、斯る淫奔なる女學生を出したのは其の責は教育者にあるとはいへ現代の女學生は斯の如くまで墮落して居ると捏造記事を掲げた末に斯る不詳事の起つたに徴して一般華族の令嬢が那邊まで墮落して居るかを知らぬ竹子は常の如く登校すると、逸早く其の姿を認めた藤井玉子が。

「本山さん一寸……」

ど、呼ぶので借ては昨夜の誤解かど不快に思つた竹子が。
「あら玉子さん、昨夜は失禮、然かし貴女随分ねえ、妾し彼んな
人少しも知らないのに貴女は妙に誤解なさるのですもの妾し本當
に口惜しかつてよ」

玉子は「アロ〜」竹子を眺め。

「まア種々お話しが在りますから此方へ入らつしやい」
ど、運動場の片隅へ呼び出し。

「貴女昨夜殿村さんと日比谷でお逢いなさつて……」

如何にして玉子が昨夜の事を知つて居るのかと竹子は不思議に
思つたが。

「其の事を後からお話し申さうと思つて居たのよ、實は昨夜貴
女が妙に思つた彼の男の奴が妾しに對して怪しからぬ眞似をしや

うとした處を折り好く通り掛つた咲子さんの兄い様に助けられて
大變世話になつたのよ」

「あら本當……？」

何故か玉子の面は異様に輝いた。

「さうして咲子さんの兄いさんは貴女とは以前から御交際が在る
の……？」

「いゝえ……昨夜初めてお目に掛つたのよ、さうして御親切にも
妾しの自宅まで送つて下さつたんですわ、ですから妾し後とで咲
子さんにお目に掛つたら良くお禮を申し上げる積りなの」

「さう……」

ど、急に冷やかな態度になつた玉子は、
「本山さん、失禮ですが貴女御姉妹があつて……」

「え、在るわ、敏雄といふ弟の在るのを貴女は知つて居らつしや
るのではありませんか」

「いゝえ御婦人よ、姉さんよ、ねえ竹子さん貴女には女優をして
居る姉さんがお在りなさるの……？」

「サツと顔の色を變へた竹子は。」

「ナ……何んでそんな事をお聞きになるの、妾しには女の姉妹は
在りませんわ」

と、打ち消すものゝ其の聲は太く震へを帯びて居た、折り柄二
人の姿を認めた昨日の合奏會に列つた三四人の友達はハヤ／＼と
驅けて來て。

「本山さん、貴女は妾し達の名譽を蹂躪したのねえ、失禮ですが
妾し達一同は貴女と絶交してよ」

と、いひ乍ら竹子を取り捲いた。

(十一)

藤井玉子を初じめ、親しい三四名の友達から、突然絶交を宣告
されたので、事情を知らぬ竹子は唯だ呆氣に取られるばかりであ
つた。

「ミ……皆さんが妾しと絶交なさるんですつて」

暫しが程は何が何んだか譯けが判らぬので流石の竹子も友達
面をサツと瞋めて居た、さうして知らず／＼の中に双頬に傳はる
涙を片袖で拭い乍ら。

「妾しは皆さんから、絶交をされるやうな覺えもありませんし

また唯今仰しやつた様に皆様の御名譽を傷けた覚えも在りませんが、一体どんな理由で斯う皆なさんが御一緒に妾くしと絶交をなさるのでするか其の理由を話して下さいまし」

と、咽び入った後ち。

「ねえ皆さん後生ですから夫れをお話しなすつて下さいまし」

と、迫られると友の一人は。

「本山さん、貴女何か良心に對して耻じる様な事は無くつて」

斯ういはれると竹子は益々五里夢中の裡を辿るやうであつたが別段之れといつて自分に思い當る事は無いから

「妾くしは別に良心に耻じるやうな事は在りません今日まで皆さんとは同じ級の中でも取り分け仲好く御交際を致して居りましたのですから妾しに不都合の事でもあるなら夫れを仰しやつて下さ

いまし、万一自分に落ち度でも在りますなら皆さんに向つて謝罪を致しますから」

斯ういつて竹子は呻に頭を下げた、すると友の一人が竹子の前に進んで。

「本山さん、妾くし達は貴女に向つて其の理由を到底口にする事が出来ないのよ唯だ妾し達は世間の誤解が恐ろしいので泣いて貴女と絶交をするのですから、どうぞ悪しからずねえ」

と、其の友は涙を流して居る、竹子は益々不思議に思つたが、若しや前夜の事を玉子が妙に誤解した爲めに斯る事と成つたのでは在るまいかと思つて。

「藤井さん、ヒョットしたら先夜の事で皆さんが妙に思つて居らつしやるのでは無くつて……」

玉子は何故か黙つて頭を振り。

「いゝえ左様では在りませんわ」

竹子は今取り付く島も無いので。

「夫れでは何れ殿村さんが御登校なさるでせうから、殿村さんと良く御相談をしましてお受けをしますから夫れまで皆なさん今の御宣告を待つて頂戴な……」

一同は互に顔見合せて何か首肯き合つたが異口同音に。

「咲子さんとも妾し達は絶交する積りなんですわ」

「えッ咲子さんとも皆さんは絶交……」

竹子は始めめて夫れと気が付いた、といふのは前夜玉子の話しに依ると、昨日の合奏會には咲子の兄の譲が列るのを欠席したといつて居たから夫れで皆んなが怒つて居るのだと解釋を下したが

「夫れにしても何んで妾しと絶交をするのだらう」

と、如何しても其の理由が判らずに居ると。

「本山さん、貴女今朝の日の出新聞をお読みになりましたか」

「いゝえ……」

日の出新聞といはれて虫が知らすか竹子の面色は忽ち土の如く變つた。

「あの新聞をお読みになると万事良く別りますわ」

と、友達の態度は益々冷やかである。

(二十)

今朝の日の出新聞を讀めば、万事の様子が判明するといはれた

ので竹子は。

「あら左様ですか、左様して如何んな事が掲て居るので御座います」

と、何氣無くいふもの、前夜の出来事が在るから、這は必らず田村が何か犬糞的の捏造記事を掲けたのであらうと察したのである。

「どんな事と云つて本山さん、夫れを妾し達から申し上げられないわ」

「……………」

「夫れに貴女は殿村さんのお兄いさんと御懸意ださうですから彼の方と御相談なされば良いわ」

と、例の藤井玉子は嫉妬の眼を輝して居た。

「あらッ……………」

と、些さか面を赤くした竹子は。

「藤井さん後生ですからそんな事を仰しやらないで下さいまし、妾しだつて眞逆か華族女學院の名譽を傷けるやうな素行は致しませんから」

と、云つて流れ出づる涙を拭い。

「貴女も御存じの通り前夜日比谷で逢つた失敬の男が日の出新聞の記者ですから彼の人が何か在りもしない事を書いたのでせう、然かし斯うして皆さんから誤解を受けるやうな事が新聞に出ましたとすれば、夫れは妾しの不徳から起つた事で何共致し方が在りませんが、其の事に就ては屹ッ度妾しの汚名も雪ぎ、亦た皆さんの御迷惑も打ち消すやうに致しますから其の時は今日の通りに御

交際をなすつて下さいましね、ね……皆さん……」
 「記事の内容は知らぬが、友達から絶交を受けた動機が判つたので、斯う云つて竹子が頭を下げるぞ。」

「本山さん、本當に御同情をしますわ、唯だ事實も訊さずに貴女と絶交をするなど申し上げたら嘸ぞ冷酷の者ばかりだと思召すでせうが、御承知の通りお互に校規の尊厳に觸れ度くは在りませんから泣いて斯んな事を申し上げるのですわ」

と、早くも友の一人は袂からハンカチーフを取り出して流れ出づる涙を拭ふ者があつた。

「良く判つて居ります、本當に皆さんに御心配を掛けて相済みません」

「どうか本山さん、力を落さずに貴女の蒙つた汚名は立派に雪い

で下さいまし、表面こそ私し達は絶交と申し上げても及ばず乍ら際でお力になつて貴女の潔白を社會へ知らせる事に致しますから

ね」
 「有難う御座います、自分の不徳から皆さんに御心配を掛けて相済みません」

と、改めて頭を下げた竹子は。

「夫れはさうと咲子さんは如何なさつたのでせう」

と、殿村咲子の登校を待つて居ると、早や授業始の鐘が廣き校庭へ鳴り渡つた」

「あら授業開始よ……」

一同は踵を返へさうとするぞ。

「あの妾しは今日休みますから悪しからず……」

竹子が悄然と語り出すと。

「何故ですの本山さん、夫れでは反つて多くの人から誤解をされますから知らぬ振りをなすつて居らつしやいよ」

「でも……」

「自分の事が今朝の新聞へ出て居ると聞いて、竹子は授業室へ入るのを躊躇して居ると其處へ驅けて来た一人の小使が。」

「本山さん、あの校長さんが一寸御用が在るさうですから直ぐにお入来下さい」

「はい……」

と、返辭はしたものの、校長から特に呼ばれたのであるから、竹子は早くも夫れと察して、小さき胸の中は早鐘を撞くやうであつた。

(十三)

小使の一言を聴いて、化石の如くに其の場に立ち慄んだ竹子は暫し言葉も出なかつた。

「唯今参ります」

血を絞るやうな聲を出して、多くの友達とは反對に廣い校庭を突き抜けて教室の廊下へ上がったが、校長室の前に佇立むと早や悲しい思いに扉の把手へ手を掛ける事が出来なかつた。

「其處に居るのは本山さんだね、一寸入つて下さい」

玻璃越しに竹子の姿を認めて聲を掛けたのは校長上田彌生子であつた

「はい……」

と、悄然として返辭はしたものの、其の用向きは豫め察して居るので、竹子には室内へ入る勇氣が無い。

「早くお入りなさい……」

校長の聲には嚴として犯すべからざるものがあつた。

「はい……」

竹子は到底思い切つて校長の前に直立不動の姿勢を執つたが、直ぐと叮嚀に頭を下げ。

「何か御用で御座いますか」

其の聲は非常に震へて居た、校長は五十に餘る今日まで二十餘年間婦女教育に身を委ねて居る人で、子弟の教育には寸毫の假借も與へぬといふ有名な人である。

「本山さん……」

と、凜乎として呼び掛けた後ち。

「貴女に少しお尋ねしたい事があります私しからお聴きする事は何事も偽らず飾らず事實を赤裸々に述べて下さい」

と、いつて卓上の鈴を鳴らすと、小使は恐るゝ入つて来た。

「何か御用で御座いますか」

「和田先生を呼んで来て頂戴……」

和田といふのは竹子の受け持ち教授であるが校長の命で直ぐに入つて来た。

「おう和田さん」

と、上田校長は椅子を與へた後ち。

「貴女から一ツ本山さんに聴いて見て下さい」

「はい……」

と、竹子の方へ眼を移した和田教授は。

「本山さん……」

と、言勢鋭く呼び掛けた後ち。

「貴女は今朝の日の出新聞を御読みになつてから登校されましたか」

偕てはと小さき胸を轟かした竹子は。

「うん」

と、頭を垂れた、すると和田教授は上田校長と顔を見合せた後ち。

「さうですか、夫れでは伺いますが貴女は昨夜日比谷公園で或る青年と散歩をなさいましたか」

「はい、其の事に就きましては一言前以て申し上げねばなりません」

と、今は常の竹子でなくて一生懸命になつて在りし事實を殘らず語つて。

「唯今申し上げたやうな次第で御座いますが、夫れに就きまして何か忌まはしい御疑いを受けて居るので御座いますか」

自分乍ら良く是れ程云へたと思ふ程滔々と述べて教授の返辭を待つと。

「本山さん、貴女は事實を捏造されますね、是れ此の新聞を御覽なさい、本校の爲めには容易ならぬ事件です」

と、いつて突き付けられた、其の朝の日の出新聞を恐るゝ眼で讀した竹子は、忽ち顔色を變へると共に。

「あッ……」
と、叫んで其の紙上へ泣き伏した。

（十四）

一時氣の遠くなつた位に驚いて泣き伏した竹子が漸く氣が付く

ど。
「本山さん……泣いて居ては判りません出来た事は致し方が在り
ませんから事實なら事實と仰しやつて下さいまし」

其の言葉には少しの同情も無い、竹子は怨めしさうな面を上げて。

「先生……」

ど、稍や暫くは和田教授の面を睨めて居たが。

「妾くしの身の上は……」

ど、聲を呑んで。

「此の記事の通りで御座います」

「えッ夫れでは貴女は双兒……」

「……」

「さうしてあの女優の松野露子が姉さんですか」

教授も校長も初めて夫れと知つたと見え互に顔を見合して居た

「は……はい……」

ど、流れ出づる涙を双の袂で拭い乍ら面を上げた竹子は。

「お耻かしい次第でございますが、夫れは事實でございますが、
其の他の記事は全然跡形も無い事でございます」

「さうですか……」

校長と教授は再び顔を見合した。

「本山さん……」

と、今度は校長から聲を掛けて。

「貴女はお打ち消しになりますが、私し達は多くの生徒を預つて居ります以上は新聞紙で立派に是れを取消し併せて本校へ謝罪せん以上は貴女の身の潔白を認める事は出来ません」

「はい……」

「夫れに就ては本校からも新聞社へ掛け合いますが貴女のお宅からも充分に掛け合つて本校の受けた此の不名誉なる記事を取り消して下さいますし」

「……………」

竹子は口惜しいのが先きに立つて頼みに返辭も出来ずに居ると「夫れから此の事件が解決するまでは貴女には停學を命じます」

「はい……はい……」

何んといふ情け無い事であらうと、竹子は繼母が此の事を知つたら如何なる事を口實として自分に辛らく當るであらうと生きたる空には無かつた。

「夫れから貴女のお宅へも先刻電話で通知をしてありますから、其のお積りで」

「はい……………」

竹子は宛ら夢に夢見る心地であつたが

「あの一寸伺いますが殿村さんが今日御登校なすつて居らつしやいませうかさう致しますれば咲子さんからお兄いさんにお願ひ申

して昨夜の事實を證明して頂きます」

「本山さん、夫れは不可ません、本校では殿村讓さんの証言には信を置きませんよ、といふのは彼のお方は今度の事に就て貴女の相手では在りませんか」

竹子は思はず美しい面を真赤にした。

「兎に角妾くしの名譽及本校の汚名は屹度拭います」

と、キッパリいふと校長と教授は。

「どうか左様して下さい」

と、いつて立ち上るや小使に命じて竹子の机から教科書や其他の雜品を持ち來らしめて其の前に並べさせた。

「夫れでは本山さん、一日も早く御登校の出來るやうになさい」

と、いゝ置いて二人は出て行つてしまつた、後とに残つた竹子

は自分の教科書其他の物を取纏めて風呂敷包みに入れ、身を切られるやうな思いで此室を出た、さうして無我夢中で校門の外へ出た。

(二十五)

悄然として母校の外に出た竹子は。

「あゝ……」

と、長い溜め息を吐いて、冷たい氷のやうな世の中が真に怨しくなつた。

「此の先きをどうしやう」

と、獨語して何處を當てとも無く足に任せて歩き出したが、此

の儘家に歸つたなら繼母の浪子が自分に対して如何なる難題をいひ掛けるかと思ふと到底家へは歸られないと人知れず熱い涙を流すのであつた、さうして青山二丁目の母校を出た彼の女は、今や知らず／＼の中に山王下まで来て居たが不圖我れに返つて。

「此上は父う様のお袖に籠つて此の濡れ衣を乾すより外は無い」
と、決心して恐怖の念に驅られながら我が家へ歸つて来た。

「おやお歸り遊ばせ」

と、ニヤ／＼妙な笑みを浮べて迎へたのは繼母が馬鹿に氣に入つて居る女中のお兼であつた。

「少し用が在つて今日は早く歸つて来ましたわ」

と、何氣無く語る竹子は、斯る奉公人にまで氣を置く今の身の上が悲しく、乳母の朝子の在りし世が今更ら乍ら慕はしいのであ

つた。

「母ア様は……」

「あの奥様はお出掛けて御在いますが何んですか今日は貴女が乾度早く歸つて来るだらうから、何處へも出さないやうにして置けどのお命令で御在いました」

「……」

偕てはと竹子は早くも繼母の眞意を知つたが態ざと素知らぬ振りをして。

「父う様は」

「御前様は殿村家へお出でになりましたとございます」

「さう……」

と、軽く首肯いた竹子は薄氷を踏むやうな思いで自分の部屋へ

入つて行つたが部屋の障子を明けて。

「あらッ……」

ど、絶叫したのは自分の留守中に誰れか入つて来て調べたのか机の抽斗や手文庫が亂暴に取り亂して在つたからである、慌て、鈴を鳴らして女中のお兼を呼んだ竹子は。

「あの此室へ誰れが来たの……」

お兼は竹子の面をチロト、眺め乍ら。

「あの奥様でございます」

ど、突慥貪にいつた後ち。

「若しお嬢様がお歸りになつてお聴きになつたら今朝の新聞の事で調べたと云へと仰しやいました」

「さう……」

竹子は餘りの事に唯だ斯う云つたのみで耻かしさうに頭を下げてしまつた、さうしてお兼の出で行つた後ちで竹子は唯一人で狭き四疊半裡に思ふ様泣き入るのであつた。

「敏さんが歸つて来たら、一ツ力になつて貰はう」

自分には唯一の味方たる義弟敏雄の歸るを待ちつゝ、再び其場に泣き入ってしまった、今の竹子には泣き度い時に泣くより外の慰めはないのである。

日は何時しか暮れたが父も弟も未だ歸邸つたらしい様子は無い奥の柱時計が九ツを打つた時。

「竹子ッ……お前さん位圖々しい女は無いな、好くノメ〜我家へ歸つて来られたねえ」

ど、口汚く罵り散らして繼母の浪子が入つて来た。

(十六)

恐ろしき繼母の劍幕に驚いた竹子は。

「どうぞ御勘辨遊ばして下さいまし」

彼れは今の場合、斯ういつて母の痛き鞭を免れやうとする。

「竹子、お前はほんといふ真似をしてお呉れだねえ、私し達はモ

ウ世間に顔向けが出来ないでは無いか」

と、云い乍ら日の出新聞を目の前に突き付け。

「コ……此の新聞を御覽、昨夜はアンナ立派な事をいつて居たが

皆んな嘘だつたのぢかねえ」

竹子は最早や黙つて居る事が出来なくなつたので。

「繼母様、新聞をお読みになつたばかりでは妾しが不品行の真似をしたやうに記いてありますが其の記事は皆んな作り事で御座います」

「まだそんな事をいつて居るのかい、事實なればこそ學校からは停學を命せられたのでは無いか」

と、口汚く罵り散らした後ち。

「矢ッ張り素性の卑しい者はねえ」

「聽えよがしの間はす語りを聞いた竹子はハット思つたが其のまゝ頭を垂れてしまつた。」

「竹子、出来た事はモウ取り返へしが出来ないから新聞に出た事が真度なら真度と白状をなさい」

竹子は父が歸つて来たなら昨夜の顛末を語らうと思つて居るので

「繼母様、父う様はどうなさいました」

「父う様のことを聴いてどうするのだい幾くからお前が口から出任せをいつて父う様を誤摩化さうと思つてもモウ駄目ですよ」

「左様いふ譯けでは御座いせんが父う様がお戻りになりましたら昨夜の事實を申し上げて御判断を願はうと思ふのでございます」

「何んだつて父う様に事實を申し上げるッ、夫れでは妾しには話せないのといふのかい」

「さういふ次第では御座いせんが昨晩妾くしに危害を加へやうと致しましたのは實は田村さんなので御座いますから」

「えッ……」

流石の浪子夫人も一寸顔色を變へたが。

「ホ、お前さんは氣が狂つたと見えるね、あの田村が何んで

そんな真似をするものですか、良い加減の口實を作つて自分の罪を免れやうと思つても駄目ですよ、第一父う様は當分お歸りにはならないよ」

「そ……夫れでは父う様は何處かへ行らつしやつたのでございませるか」

「實は急に役所の御用で今朝關西地方へ御旅行になつたのだよ」

「えッ……夫れでは今朝の新聞は御覽にならないのですか」

「いえ新聞もお読みになつたし、殿村さんにもお逢いになつてお前の學校へも新聞社へも行らつしやつたが私しが新橋の停車場までお送り申したら歸つてから處分をするから夫れまでにお前から事實の真相を確かめて置けと仰しやつたから、斯うやつて訊くのですよ」

「……………」

竹子は父が殿村議に逢つたと聞いてホッと安心をなし。

「左様で御座いますか」

と、初めて其の面に希望の色が輝いた、すると浪子夫人は。

「竹子、此の事が解決して我家で受けた耻辱を雪ぐまではお前さんは謹慎をしなければ不可ませんよ」

「はい……………」

と、頭を下げる。

「夫れまでは此方へお入来……………」

と、繼母が立ち上つたから不安の念を抱き乍ら其後ごに従ふと浪子は先きに立つて庭に下りるや背後から押すやうにして竹子を倉庫の中へ入れて外からピンと錠を卸してしまつた。

「あッ……………」

餘りの事に竹子は倉庫の入口に頭を伏せて泣き崩れてしまつたが斯くては徒らに斯る處に罪無くして幽閉の憂き目を見なければならぬので。

「カ……………繼母様、お腹も立ちませうが今度の事は眞ッ度く夢にも知らぬ濡れ衣で御座いますからどうぞ此處からお出しなすつて下さいませし」

と、中から大戸の棧に手を掛けて浪子夫人の寛恕を乞ふのであつた、其の聲が耳に入つた夫人は。

「お前さんのやうな、家の名譽を傷ける人は柔しい事をして置けばどんな事をするか知れないから父う様のお歸りになる迄は出さず事は出来ませんよ、夫れども彼の新聞に出た事實を隠さず白状をするなら出して上げないでも無いが頭から自分に都合の悪いことは何んでも知らぬ存せぬと剛情を張る人は氣の付くまでは少し不自由の思ひをするのも薬りになるだらうよ」

と、いゝ捨て、足早やに母屋の方へ行つてしまつた。

「あゝ……」

今は取り付く處も無いので竹子は眞ッ暗なる蔵の中で双の手を合せて神佛の加護を祈るより外に手段は無かつた。

「何んといふ情け無いことであらう眞ッ度くの母アさんは在つても公然と名乗り合ふ事は出来ないし、義理在る母ア様は何が憎く

いのか以前とは變つて今日此の頃は此の妾しに出て行けがしの事はかし遊ばすし」

と、心の中に身の薄命を泣いて此の上は唯だ運命に任かせて濡れ衣を乾すより外に手段は無いと觀念の眼を閉ぢてしまつた、斯うして覺悟をして見れば假令身は倉庫の中へ檻禁されて居ても時節さへ來れば身の潔白が判るであらうと、今は反つて精神の落ち付きを覺えた。

「夫れにしても殿村さんこそ本當に妾しを助けて下さつたばかりにあんな記事を掲されて嘸ぞ御迷惑を遊ばして居らつしやるだらう」

と、精神が落ち付くと共に讓の身の上が案じられるのであつたさうして蔵の中に何もせず外間との消息を絶たれて三度の食事

を女中が運び入れる時と便所へ行く時の外には日の光りといふものを見ずに三日を過してしまつた、さうして三日目の午後七時頃

「お嬢様御飯で御座います」

と、外から女中のお兼が聲を掛けたのであるが竹子は此の朝から少しく気分が悪くて食欲が進まないから。

「御飯は要らないわ……夫れより妾しは何んだか気分が悪いから繼母様に今晚だけは母屋へ眠すませて下さるやうにお願い申してお呉れ」

と、頼むとお兼は佛頂面をして。

「奥様が何んと仰しやるか判りませんが申し上げて見ませう」

と、入口から引き返へして行つたが其の儘何んの音沙汰も無くて時は徒らに経過して夜は次第に更けて行くばかりである竹子は空

敏雄は姉の手を執つて。

「姉さん嘸ぞ辛らいでせう、さア此方へお入來なさいまし、僕は貴女の斯んな事になつて居るのを少しも知らなかつたのです、實は今日聽いて屹驚したのですよ本當に」

と、先き立つて母屋の方へ行く様子に竹子は嬉し涙を流して。

(十八)

腹を耐らへウツラ／＼して居ると誰れか倉庫の前に佇立んだやうなのでハツと思つて聴き耳を立てると、突然り入り口を開けて。

「姉さん僕ですッ……」

と、いつてツカ／＼と入つて來たのは義弟の敏雄であつた。

「敏さんお母様は……」

「母アさんは留守です、何に歸つて來れば僕が辨解しますから、早く入らつしやいまし」

快活なる敏雄は竹子の手を執らんばかりに。

「姉さん、母ア様は眞つ度くどうかして居るのですせ、僕の思ふには確に惡魔が乗り移つて居るのです、夫れに母ア様の眞意も漸く僕には判りましたが夫れに就いては母家で悠り御相談をしませう」

「ですけれども敏さん、貴師母ア様に後ごで叱られてよ」

と、弟の身を氣支ふて竹子が躊躇して居ると、そんな事に頓着せぬ敏雄は。

「そんな事は構いません、幾ら親だつて間違つた事をして居るな

ら、夫れに對して御意見をすることは子たる者の義務ですよ、僕はね姉さん今夜大に母と論判をする積りなのです、第一失敬なのは彼の田村の奴ですせ」

と、今は敏雄も非常に激昂して居る。

「夫れでは敏さん、妾し眞つ度く氣分が良く無いのですから私しの部屋へ行きますよ」

「えい行らつしやいとも、少しも遠慮は要りません」

と、姉の後ごに従つた敏雄は椽側に上ると自から先きに立つて竹子の部屋の障子を明け。

「姉さん、悠り御相談をしませう」

初めて姉の面を正視した敏雄が。

「あらッ姉さん、大層お顔の色が悪いやうですが餘ッ程御氣分が

悪いのですか」

「いえ夫れ程では無いのですが何にしろ敏さん日の光りといふものを此の二三日は見ませんからねえ」

「ゴ……御尤もです」

何時しか双の拳で流れ出づる涙を拭った敏雄は。

「姉さん葡萄酒を召し飲つて御覧なさいまし」

と、呼鈴を鳴らすと是れを聴き付けて入つて来た女中のお兼は意外千萬にも竹子が藏から出て来て居るのを眺めると大に驚いて

「あらッ若様ッ……」

呆氣に取られて二人の面を見比べつゝ二の句が出ぬのである。

「何んだ貴様其の面は……」

「何んだではございませぬ、お嬢様を藏からお出し遊ばすと奥様

がお戻りになつて大變でございますよ」

浪子夫人の怒りを恐れてお兼は敏雄の面を穴の明く程見入つて居た。

「黙つて居ろ、貴様なぞの判つた事では無いから餘計なお饒舌りをしなくても可いのだ、夫れより父う様のお部屋へ行つて薬用葡萄酒を早く持て来い」

「はい……」

と、返辭はするものゝお兼は立ち兼ねて居る。

「貴様主人の命令を聴かぬか、一体貴様達は僕や姉さんを何んだと思つて居るのだ馬鹿ッ……」

と、大喝した敏雄はお兼が座敷から出て行くと突然竹子の手を執つて。

「姉さん、僕は貴女に對して謝罪をせんければならぬことがあるのです」

と、云つて敏雄は俄かに頭を下げた。

(十九)

義弟の敏雄が自分が幽閉されて居た倉庫の中から救い出して呉れたので不幸薄命の佳人竹子は心から其の厚意を喜びながら、此の場合繼母の浪子が戻つて來たら定召義弟が迷惑するであらうと小さな胸を痛めて居ると意外千萬にも其の弟の口から。

「姉さん僕は貴女に謝罪をせんければならぬ事があるのです」

と、云つて俄かに頭を下げたので流石の竹子も暫しは呆氣に取

られて敏雄の面を腫めて居た。

「ト……敏雄さん……」

と、膝を進めて四邊りを見廻し。

「夫れは亦たどう云ふ事なのです、妾しは貴郎にお禮をしなければならぬ事は在りますが謝罪をされるやうな事はないわ」

慌て、手を振つた敏雄は。

「處が大に在るのですよ姉さん」

と、語尾に力を入れて。

「實はねえ、姉さん僕は今日まで斯んな事にならぬやうに再三母アさんに御意見したのですがどうしてもお用いが無いのです、と云つたばかりでは、神様のやうなお心を持つて居る姉さんには判りませんが僕と云ふ者が在るばかりで姉さんは今日の如き御苦勞

をなさるのです」

と、云つて再び頭を下げた敏雄は母の浪子が乳母朝子の亡くなつた後に俄に自分の腹を痛めた敏雄に此の家の財産全部を相続させやうと在らゆる手段を用いて罪も無い義姉を屋敷から追い出さうとして豫て竹子に懸想して居る日の出新聞社の田村を繰つて居る事を落ちも無く語つた初めて夫れを聞いた竹子は半ばは信じたが半ばは疑の雲を掛けて

「でも夫れでは彼の田村さんのする事が矛盾して居るわ」

「誰れも左様思います、然かし母アさんの黒幕には彼の別荘守高橋が附いて居るのです、私しも初めは信じて居ませんでした但し實は母アさんが僕に其の事を話したのです」

と、正直なる敏雄は實母が心得違ひの爲めに義理のある姉に苦

勞をさせるのが此の上も無く心外と見えて、双の拳を緊つかと握つた。

「さうですか、然かし敏雄さん此の事はお父う様は知らないのせう」

「無論です、夫れだから僕は姉さんに濟まないのです、僕さへ生れなかつたら貴女に斯んな辛い思いはさせ無いです」

何時しか双頬へ流れる熱涙を手の甲で拭い乍ら。

「然かし姉さん、御安心なさいまし、幾くら母さんが左様云ふ悪い計畫をしやうとも僕は屹度今夜の中に母ア様を改心させて見ますから」

と、勢好く云つた後ち。

「其の代り今までの事は許して上げて下さいよ姉さん」

と、尙ほも聲を潜めて。

「其の代り僕は姉さんと共に今夜は母アさんの戻りを待つて屹度以前のやうな母アさんに復活させて見ます、然し幾ら僕が云つても母アさんの聴き入れぬ時には僕にも相當の考へが在りますから」

「……………」
其の語氣から察しても敏雄は萬一母が自分の意見を聴き入れぬ時には自ら進んで此の屋敷を出やうとするらしい。

「敏さん……」

思はず膝を進めて斯う叶んだ竹子は義弟敏雄の双手を握つて。

「何んにも云いません妾しは敏さんのやうな弟を持つたのを此の上も無い仕合だと思ひますわ」

萬感交々小さい胸に湧き返つて竹子はハラ／＼と涙を流した、折

り柄支關の方で。

「お歸りッ……」

と、意勢好き車夫の聲は浪子夫人の歸邸を知らせるのであつた

(二十)

支關の方で母の歸邸したらしい聲が聴こえると敏雄は。

「姉さん母アさんが歸つて来たやうです僕は是れから大に談判をする心算りですから貴女は母アさんが何を云つても黙つて居らつしやい」

自分を思つて呉れる敏雄の此の言葉は今の竹子に取つては百萬の味方を得たよりも優つて居る、が敏雄から聴いた繼母浪子の企

てが果して事實であるとしたら歸着する處は自分の在る爲めに義理ある弟に心配をさせ大恩ある繼母が恐ろしい毒計をして居るのであるから一層の事自分は此の家を出てまじはうかと心の底で思案に迷つた。

「あら左様かい……」

廊下の外には女中のお兼が夫人に何にか報告して居ると見え語尾の荒い浪子夫人の聲が手に取る如く洩れて来た、ハツと思つて義姉弟が顔を見合せた時障子を荒々しく開けた浪子夫人は頭だけ部屋の中へ入れて。

「あらッ竹子ッ……お前は誰れの許しを受けて斯んな處へ来て居るの……？ 夫れから敏雄さんも何んだつて竹子を此處へ連れて来たのです、今女中から聴けばお前が竹子を出して来たのださうだ

ね」

浪子夫人は柳眉をキリキリと逆か立て、我が子の敏雄を吃つと睨んだ。

「母アさん、姉さんは僕が藏から出して来たのです、然かし母アさん何にも姉さんに罪が無いのに……」

と、怨めしさうに心得違ひなる我が母の面を見上げると。

「何んだねえ敏さん」

浪子夫人は思ま／＼しさうに敏雄を瞰下した後ち。

「敏さん一寸お入來なさい、お前さんには少し話があるから」

恐ろしい見暮で斯う叫んだ母親を冷やかに見上げた敏雄は。

「僕も母アさんに申し上げ度い事があるのです」

と、云ひ乍ら無難作に起ち上つたが萬ヶ一にも母が我が言葉を

容れぬ時には自ら進んで姉の爲めに我が家を出やうと決心して居る敏雄は少しも悪怯れた様子も無い、さうして母に従つて座敷の外へ出たが一寸引き返へして来て。

「姉さん決して心配をせんやうにして下さい不肖ながら僕も一個の男子ですから一旦姉さんに誓つた事を反古にはしませんよ」

此の勇ましい言葉を聴くのは姉として竹子は頗る辛いのであつた。

「敏雄さん、妾しは貴郎のお心は良く判つて居ますからどうぞ母ア様のお心に逆らうことは止めて下さいまし、妾しは決して財産などは要らないのですから」

と、泣く音を忍んで。

「唯だ新聞に書かれた彼の不名誉な濡れ衣だけを乾して頂けばモ

ウ夫れで澤山よ夫れでないと學校の名譽は勿論、殿村さんにもお氣の毒ですから」

「良く判つて居ます、兎に角萬事は僕の胸中に在りますから決して餘計な御心配をせぬやうに願ひます」

と、云ひ捨て、行つた、後とに残つた竹子は悲しき我が身の境遇を思ふにつけ慕つかしきは實母や姉の松子であつた、假令へ三度の食を二度にしても眞の親姉弟が一ツ家に睦く暮らしたら如何に楽しいことであらうと思はず其の場に泣き伏した、すると奥座敷から。

「母アさん是れ程申し上げてもお判りならぬのなら僕にも考へが
あります」

と、罵る義弟敏雄の聲が高い、ハツと氣の付いた竹子はヒヨロ

くと立ち上つてソツと廊下へ出た。

「夫れではお前は彼の竹子の奴と一つ腹で此の母アさんを苦めろのだね」

と、罵り返へす浪子夫人の聲も高かつた斯る淺間しき親子の争いも自分の身から起つたと思へば竹子は我れにもあらず庭の面へ飛降り奥座敷の椽先まで耳を澄ました。

(二十一)

繼母と義弟が自分の事で罵り合ふ聲を聞いた竹子は我れにもあらず庭の面へ飛び降りた、悲しき自分を弔ふやうな、名も知れる虫聲の断續は殊に身を切られるやうである、秋とは云へど冬を降

りにした夜の風はいと哀感を増すのみである。

「敏さん、夫れではお前は母アさんが此の位苦勞をして居るのを何んとも思つて呉れないのだね……」

と、疍走つた母の聲に續いて敏雄が

「母アさん、僕は其の御心が怨めしいのです、成程僕が可愛いと云ふ子を思ふ御情けには違ひありませんが、僕は……」

感極つて咽び入つた敏雄は。

「腹こそ違へ血を分けた姉さんに辛い思ひをさせて自分一人が榮華を食りたく無いのです、ねえ母アさん、姉さんは頼りの少い身体ですよ、さうして貴女を生みの親よりも大事に思つて居るのですよですからモウ今のやうな事は仰しやらないで、以前のよう

に一家は楽しく暮らさふではありませんか」

暫らく言葉が切れて居たが再び繼母浪子が聲高に。

「敏さんお前の云ふ事は良く判つて居ますよ、だけれどもね彼の竹子は双兒では無いか、卑しい素性の女が産んだ双兒では無いか此の一言を庭の面で聴く竹子は齒を喰いしばつて涙を呑んだ。」

「母アさん、夫れが間違つたお考へだと云ふのです、假令双兒にしろ世間に例の無い事では有りません、さうして貴女は卑しい素性と仰しやるが、そんな事を仰しやるのは母ア様としては實に怪しからんと思ふのです、僕が先日貴女から仰つたのは姉さんの母アさんと云ふのは以前當家へ仕へた小間使で其の家系は立派な武士だと云ふではありませんか」

飽くまでも母の心を以前のやうに返へさせやうと努力する敏雄は凜乎として斯う云い放つた。

「是れまで申し上げてお判にならぬのなら僕も本山家の嫡子です家の名譽には代へられませんがから僕は不孝と云はれても家を出るばかりです、さうして義理の在る姉さんの身を助けねばなりません」

斯くと聴いた竹子は思はず霜白き大地にひれ伏して涙と共に障子に映つる敏雄の影を拜んだ。

「敏さん、お前は唯だ姉さんの身ばかり思つて居るが、あの子はお父様の胤だか何んだか知れやしないのだよ」

「ウ……嘘そです、今更左様な嘘ことを仰しやつて」

敏雄も一生懸命に反抗して居たが、是れを聴いて居る庭の竹子は。

「あゝ敏さんがあの様に心配して下さるけれども繼母さんがあの

通りでは」

と、雨の袖に流れ出る涙を拭い乍ら、ソツと足音を盗んで以前の部屋へ戻つて来た、さうして何か深く考へて居たが。

「妾しが居ては敏雄さんはお母ア様とあのやうに御争論をなさるし、此のまゝにして置けば敏さんが家を出ると云ふのだから一層のことに妾しは……」

と、小さき胸の中に何事か思案をして傍らの硯函を取り寄せてスラ／＼と一通の遺書を認めると再び足音を盗んで庭へ飛び下り靴脱ぎの上にあつた女中の下駄を穿くと戦く足を踏みしめつゝ、暗みに紛れて裏木戸から表へ逃がれ出た。
奥座敷ではまだ親子の云ひ争ふ聲が高い。

(二十二)

死を覺悟して我家を抜け出した竹子は餘所乍ら父に逢ふことの出來ぬのが悲しかつた、さうして何處を當てと無く九段の靖國神社前まで来たが。

「母アさんと姉さんに一目逢つてから死にたい」

と、云ふ念がムラ／＼と起つた、どうせ義理堅い實の母は自分に對して親子の名乗りはして呉れまい、けれども自分丈けは母と信じ姉と信じて餘所ながら暇乞をして行くべき處へ行かうと決心した、さうしたならば自分では分めてもの諦めも付くし、義弟敏雄への義理も済むと覺悟した、斯くと心の中で極めてしまふと竹

子は再び漆端をトボトと歩き出したが下二番町で赤坂行き
の電車に乗つて、永年學の窓とした母校の前に悄然と佇んで長い長
い別れを告げた、寄宿舎の窓から洩れる燈火、舎監室のカーテン
一として思ひ出での種で無いものはなかつた思へば冷たい世の中
であつた、情けない浮世であつた、身は華族の家に生れて十七の
春までは世の中の辛い事も悲しい事も知らずに暮らしたのに、
乳母であつた朝子が亡き人の數に入つて僅か三四ヶ月の日子を過
ぎた今の身は、生れた家にさへ居る事の出来ぬ身の上となつて居
るのである、斯う思ふと小さき竹子の胸の中は張り裂けるばかり
で何んにも知らずに自分の手を握つたまゝ歸らぬ旅に上つた朝子
の身の上が羨ましかつた、暗に聳ゆる高い校門は過ぐる日には親
しき友と共に嬉々として潜つた深い一畝の馴染である夫れも今宵が

見納である、斯う夫れから夫れへと思いを走せると竹子は泣くに
も泣かれぬのであつた。

「あら……」

と、血に啼く一聲を残し後しる髪を曳かれる思いで此處を離れ
た竹子は今度は日比谷行きの電車へ乗つた、さうして公園前で降
りると不圖先き夜の事を想倒した恐ろしかつた田村の誘惑、嬉し
かつた殿村讓の救い、さうして生れて初めて異性と手を握り合つ
た其の刹那の温かみ、あらぬ醜聞を日の出新聞に書かれたが、竹
子は今も尙ほ其の時の事を忘れられぬ、萬一自分が彼の神の如き
高潔なる精神を持つて居る殿村さんと終生の苦勞を共にするやう
な事が出来たら如何に幸福であらう、如何に女と生れた甲斐があ
らう、彼の時限りお目にも掛らぬがあの新聞を見た彼の方は嘸ぞ

毎逡巡を遊ばして居るであらう、お慕い申したとて詮無き事である。日比谷から我が家へ歸る途中……其時の記憶を辿ると俄かに胸に動悸の高まるのを覺えた、が竹子は我れと我が押さへ難き心を押さへた。

「斯んな空想を描いたとて何んにならう夫れよりは自分は持つて生れた悲しい運命に従はなければならぬ！」

とは思ふもの、胸のドン底には無形の影が宿つて居る、凜々しき殿村讓の姿が深く刻ざまれて居る。

「彼の方や咲子様にも餘所ながらお別れを告げて來ませう」

と、心の中に極めた竹子は程近き殿村家の門前に行んで長い長い別れを告げた。

戀しき讓や咲子の幸福を祈つた後ち段々更ける夜の巷を帝都劇

場の樂屋に運んだ多くの女優は自分の持役が済むと派出なべールに面を包み自用车で何處へか歸つて行く、モウ閉場てしまつたのに待つ姉の姿は未だ見えない、誰れも彼れも樂屋口に一人の美人が行立んで居るので振り返り勝ちに歸つて行つた。

「あの一寸伺いますが松野露子さんはまだ残つて居らっしゃいますか」

と、最後に出て來た一人の女優に聴くと其女優は竹子の身の廻りを見上げ見下ろして。

「露子さんはお母アさんが大痛で休んで居らっしゃいます」

と、云つて不思議さうにアツと竹子の美しき面を覗き込んだ。

(二十三)

竹子は此の一言を聴くと反け返るばかりに驚き。

「ソ……夫れは本當でございますか」

と、問ひ返す語氣が餘程變つて居るので相手の女優は。

「え、本當ですわ、實は四五日前までは左程でも無いので出勤をされて居たのですが二三日前からドツと重くなられてどうやらお氣の毒な具合ださうですわ、夫れで松野さんの持役は新聞に出て居ります通り妾しが變つて勤めて居ますのよ」

新聞に出て居ると云はれたので竹子は急に恥かしくなつた、自分分は此の二三日倉庫の中に幽閉されて居て新聞を見ないので實母

の病氣を知らなかつたのを此の女優は新聞も見ぬ女と思ふであらうと思はず顔を赤くすると。

「さうして貴女は松野さんの御姉妹か御親類のお方でございますか」

と、云つて再びチロ／＼自分の面を覗き込まれた時には流石の竹子も日の出新聞の記事が在るので穴でもあれば入りたい位であつた。

「いえ親類と申す譯けではございせんがお眼に掛つて少々伺い度い事があるものですから此方へ伺いましたのでございませぬ、お歸りのお足をお留め申しまして何んとも相済みませぬ」

町噂に頭を下げると此の女優は頗る親切の婦人に見える。

「どう致しまして決してそんな御斟酌には及びませぬわ、さうし

「明日でも松野さんのお宅へ行らつしやつたら可いわ」

竹子は此の女優の親切に云つて呉れるのを心の中に喜び。

「難有うございます、さう致しまして松野さんのお宅は御近所で
ございますか」

女優は一寸考へて。

「あの方のお宅は浅草ですわ、一寸お待ち遊ばせ事務所で調べて
来て上げますから」

と、云つて竹子を樂屋口に待たせて置いて舞臺裏の方へ入つて
行つたが約十分ばかり経過といそ／＼として出て来た。

「貴女判りましたわ、浅草の今戸川岸でございますわ、番地も是
れに書いてございますが事務所の人の話しでは何んでも橋場の聖
天様の直ぐ下ださうでございます」

と、云つて一葉の小型名刺を差出した。

「難有うございます、飛んだ御手数を掛けて相済みません」

と、厚く禮を述べて其の名刺を手執ると、此の女優の名刺と
見えて、表には帝都劇場専屬女優花園菊子と記してあつたが、其
の裏面には姉と信する松野露子の住所が鉛筆の走り書きで記して
あつた。

「難有うございます、夫れでは明日はお伺ひする事に致します」

「さう遊ばせよ、では失禮を致します」

と、軽く會釋をして女優は待たせて置いた自用車に身を移すと
背後に得ならぬ芳香を送つて馬場先門の方へ行つてしまつた、後
とに残つた竹子は今宵は泊るべき家も無い身である、死を覺悟し
た身である、が一目など餘所ながらも逢つて長の別れを告げや

うと思つて尋ねた姉には逢ふ事が出来ぬのみか生みの母と信じて居る其の人が明日をも知れぬ大病と知つたので。

「是れから直ぐ伺つて一寸でも可いからお目に掛らう」

と、此處を離れて数奇屋橋から電車の客となつて銀座四丁目の角から淺草行きの電車に乗り替へたが此の時服部時計店の屋上なる大時計は十二時を報じて居た、竹子は車中を一寸見廻して隅の方へ腰を下ろした、が自分が帝都劇場を後にして数奇屋橋から電車へ乗つた時尾行して来た一人の書生が同じ電車の客となつて其の一舉一動に注意をして居るとは夢にも知らない。

（二十四）

紅球を點して帝都の中央を北へくと疾走する淺草行の終電車は、瞬く裡に京橋も過ぎ、日本橋も後とにして本石町の角から右折した、さうして淺草橋の停留場にヒタリと留つた時には多くの客も降りて車中は竹子を尾行したる怪しの書生と竹子のみとなつてしまつた、竹子は自分を窺ふ奴とは少しも知らないから別段氣にも留めずに居ると、其書生は竹子の前に腰を下ろして。

「失禮ですが身女は何處まで行らつしやるのでございます」

見知らぬ男に電車の中で聲を掛けられたのであるから竹子は一寸返辭に窮したが點つて居る譯けにも行かぬので。

「はい終點まで参ります」

書生は一寸考へて居たが。

「此の電車は上野の車庫へ入るのですが夫れでは貴女は大廻りを

してお歸りになるのですか」

斯う云はれた竹子は此の書生は其の筋の刑事かと思つたので。

「いゝえ淺草の電門で乗り替へて南千住行の電車で聖天町まで参りますのでございます」

と、何氣無く答へると、此の書生はニッコリ笑つて。

「夫れでは貴女今夜の中に松野さんのお宅へ行らつしやるのでございませうか」

意外千万にも自分の行き先きを知つて居るので竹子は少からず驚き。

「夫れでは貴郎は……」

と、如何なる階級の人かと氣味悪く思つて聴く。

「良く知つて居るでせう。實は僕が貴女の行く處を知つて居る理

由は先刻帝都劇場で貴女が幕内の者に聴いて居たのを存して居るのです、實は僕も彼の劇場の作者部屋にウロ／＼して居る者なのです」

夜に紛れて帝劇の樂屋口附近に迂路／＼して居る不良學生とは夢にも知らぬ竹子は大いに喜んで。

「おや左様でございませうか少しも存じませんので飛んだ失禮を致しました」

と、今は此の書生の言葉を信じて叮嚀に頭を下げた後ち。

「甚だ失禮でございませうが貴郎様は松野と仰しやるお方のお住居を御存知でせうか、御存知なら初じめて参りますので判り兼ねますからお教しへ下さいませんでせうか」

すると此の書生は軽く首肯いて。

「知らぬ處では在りません、僕の先生の家の二三軒手前ですから松野さんのお宅まで御案内を致しませう」

と、親切に云つて呉れるので竹子は大に喜び。

「本當に良い處でお目に掛りました、實は明日伺はうと思つたのですが、急な用が在るものですから斯んな夜更けに参りました」

「なに田舎と違つて幾ら淋しいと云つても東京の市中ですからお案じなさる事はありません」

と、さも親切らしく云つて呉れるので竹子は此の男を頼母しく思つて、雷門で南千住行の電車に乗り替へ聖天町で下車した時には、モウ辨天山の鐘が一時を打つて居た。

「本當に御迷惑でございませぬえ」

「さう一々お禮を仰しやらんでも可うございませすよ」

と、身を摺り寄せて、道を急ぐ此の書生は段々待乳山へ登つて聖天様の境内へ入つて行く、四邊りの淋しさと此の男の舉動に不審を起した竹子は。

「若し貴郎、松野さんのお住居は斯んな淋しい處でございませるか何んですか先刻伺つたには橋場今戸とか仰しやいましたが」

と、云つて立ち留ると彼の男は竹子の片袖を緊つかと掴んで

「おい君、僕は松野の住居なんざア知らないのだよ」

と、凄い笑みを浮かべて立ち留つた、高い大銀杏の梢には羽叩き恐しき鳥が怪しき聲で啼いた、暗の木の間から仰ぐ大空は雨雲の脚が早い。

(二十五)

帝劇の作者だと云つて竹子を姉の家に案内しやうと此の淋しい待乳山の聖天の森へ連れ込んだ怪しき書生が。

「僕は松野の家なんか知らないよ」

と、今までとは違つた凄惨な文句で云い放たれたには流石の竹子も愕然として反り返るばかりに驚いた。

「ッ……夫れでは貴郎は」

と、齒の根も合はずアルく身を震はせて隙を見て逃げ出さうとして居ると。

「おい君ッ、何にもさう驚かなくともいゝよ僕は神田の稻妻義團

の幹事黒坂健次と云ふ者なんだ」

神田の稻妻義團と云へば良く新聞の三面に不良學生の團隊として屢々記されてある聴くも恐ろしき名前である。竹子は心の中に軽々と見知らぬ人の言葉を信じた輕擧を悔いたが、今は驚に見込まれた小雀も同様だ、どうする事も出来ないのだ逃げるにも逃げられないのだ、さうして此の男の要求は云はずと知れて居るのだ竹子は悲しき運命に泣いた、慕かかしき實母、未だ一度も親子の名乗りをしたことの無い生みの母が危篤と知れて居る今の場合に悪魔の爲めに斯る處に連れ込まれたのだ。泣くより外に術は無いのだ。

「何をさうメソク泣いて居るのだ。僕が君を此處へ連れて来た理由を云つて聽かせるが實は帝劇の裏口で網を張つて居ると君と

女優の話しさ。良い種では無いかねえ、見逃せるものかね、是れ丈け云つたら君だつて今時の女學生だ萬事は了解して居るだらう何事も運命と諦めて僕の意に従ひ玉へ、其の代り夜が明けたら君の行く松野の家へ案内して上げるよ」

と、云つた怪漢は人目無ければ竹子の左手を握ると共に素早く右の手を肩へ掛けやうとした。

「何をなさるのです」

と、力に任せて振り拂つた竹子は。

「どうぞ左様な事を仰しやらずに妾くしを歸へして下さいまし」
 兩の手を合せて哀願する。

「やかましいやいッ」

と、一喝した彼れは。

「今更らごんな泣き言を並べたつて仕様がななのだ、一旦斯うと見込んで此處まで連れて来て置いて此のまゝ歸へす馬鹿が在るか」
 と云ひ乍ら懐中へ手を入れたかと思ふと明皎々たる短刀を突き付け。

「聲を出すぞ承知をしねえぞ」

と、再び凄い笑みを浮かべ。

「何も手荒な真似をして僕の意に従へとは云は無なのだ、然し僕にも考へがあるのだ、返辭次第に依つては考へがあるのだ、さア何んとか返辭をしないか」

チリ／＼と詰め寄つて來たので今は絶對絶命と竹子は身を翻へしてバラ／＼と逃げ出した。

「迂奴、柔しく云つて居れば逃げる積りだな、逃げやうと云つた

つて逃がすものかい」

後と追つて来るので。

「誰れか来て下さい……」

と、竹子は金切り聲を出して勝手知らぬ山内を以前来た道へ逃げ出したが、どう道を間違へたのか往々に往かれぬ山添の畦へ突き當つててまつた。

「あッ……」

と、叫んだ時にはモウ怪漢の手が懐れな竹子の肩先きに届いて居た。

「おい何處へ逃げる積りなんだ」

彼れは會心の笑みを浮べた、竹子の運命は如何に……。

二二六

嗚呼何んど云ふ薄命の婦人であらう、今や竹子は恐ろしき惡漢の爲めに純潔無垢の身体を汚さねばならぬ運命に迫つた、終生拭ふべからざる汚辱を受けねばならぬ運命に迫つた、何んと云ふ情け無い運命であらう。彼の女は今助けを呼ぶ聲さへ出なくなつた、さうして身を震はせ乍ら。

「どうぞ御勘辨遊ばして」

と、脛もあらはに大地にピツタリ坐つてしまつた。

「おい君ッ、随分譯けの判らない事を云ふな僕は先刻も云ふ通り手荒い真似をしてお前の身体を自由にしやうと云ふのでは無いせ

然かし稻妻義團の者に見込まれたのは不運と云へば不運なのだから厭でもあらうが諾の一語を洩らせて呉れ夫れども如何しても聴かれないと云ふなら止むを得ないから、非常手段に訴へるより外に詮様が無いのだ」

と、云ひ乍ら四邊りを見廻して。

「さア何んとか返事をしないか」

竹子はシク／＼泣き出して。

「どうぞ御勘辨遊ばして下さいまし、妾しは左様云ふ事は知らないのですございますから」

セ、ラ笑つた怪漢は。

「知らなければ教へて遣るよ、何も怖いことは無いのだから。」

「……」

竹子は再び此の男の隙を見出して逃げられるだけは逃げんと一散に以前来た道へ駆け出した、すると其の肩先きをムンズと掴んで。

「え、面倒な阿魔だッ……」

絶叫するが早いか二三間もズル／＼と引戻した、大の男に力任せに引戻されたので今は張り詰めた勇氣も失せた。

「アッ……」

と、悲しい一聲を上げると共に哀れにも竹子は其場へ撞と倒れた。

「ウム……」

野獸の如き唸きと共に無惨や怪漢は纖弱き竹子の上に乗掛らんとした、未開紅の花は仇な嵐の爲めに哀れ泥土の上に散らうと

した。

「あれ……」

夜の寂寞を破る竹子の悲鳴は絹を裂くやうであつた、折り柄圖の彼方に一個の黒影が現れたと思ふと。

「ナ……何をしやがるのだッ」

と、叫ぶと同時に怪漢の腦天目掛けて樫の棒を打ち下ろした。

「こん畜生、巫山戯た真似をしやがつて御山内を汚しやがる」
と、亦たも打ち下ろした樫の棒は怪漢黒坂の肩先きに當つた。

「あッ……」

流石の怪漢も不意に現れた此の黒影に驚いたやうであつたが痛手を堪へて。

「他人の仕事の邪魔をすると爲めにならんぞ」

今は竹子には目も呉れず抜き放つた短刀を振り廻して斬つて掛つた。

「おや乙な真似をしやがるな」

一歩下つた黒影は手にせる樫の棒を振り冠つて。

「さア此の兄いさんが斬れる者なら斬つて來い、四番組の辰は手前のやうな野郎に斬られるドチぢや無えぞ」

初めて知る此の黒影こそ聖天の山内を警戒する消防夫であつたさうして聲を厲まし乍ら。

「姉さん危いから退いて居ねえ、此の野郎は俺れが今フン縛るか
ら」

「なにッ……」

と、黒坂は飛鳥の如く身を躍らして斬り込んだ時。

「あッ……」
と、悲しき聲を上げたと思ふと助けに来て呉れた其の人はパツ
タリと倒れた。竹子は此の有様を暗に透かして最早や自分は舌で
も噛んで死ぬより外に手段は無いと最後の決心をした。

(二十七)

危機間髪を容れぬ一刹那、不意に自分を救ふ爲めに躍り出でた
壯漢のあつた時には、竹子は心の中に天地の神祇を拜して喜んで
さうして怪漢と此の壯夫が黒闇々裡に格闘を始めたと思つた、けれど女な
がらも飛び出して自分の恩人に加勢をしやうと思つた、けれど織
弱き女の身は意のみあせつても、如何ともする事は出来ない、唯

だ我が救ひの主に神佛の加護を千祈萬禱するのであつた、すると
其の救の主が怪漢の突き出した毒刃を受け損じ悲鳴と共に撞と倒
れた時にはモウ萬事休したと思つて最後の決心をしたのであつた
「醜態を見ろ、餘計な真似をしやがるから斯んな事になるのだ、
飛んで火に入る夏の虫と云ふのは手前の事だぞ」

と、散々毒口を吐いた怪漢は。

「可愛想だが斯うなつては稲妻義團の掟に従つて貴様の生命は貴
ふから地獄でも極楽でも行き度い處へ行けッ……」

此の毒舌が耳に入ると竹子は。

「あゝ何んと云ふお氣の毒の事だらう」

と、思はず口の中に念佛を稱へて双眼を閉じた。

「さア引導を渡して遣るぞ」

怪漢はツカ／＼と寄り進んだと思ふと倒れた消防夫の上に馬乗りになつた、さうして將に振り上げた短刀を咽喉元へ突き立てやうとする時。

「あッ……」

と、怪漢は悲鳴を上げて傍に打ち倒れた、と思ふと先きに倒れた消防夫はスツクと起ち上つた。

「馬鹿野郎奴、此方に及物が無えから倒れて見せたのだ、夫れを本當に思ふ手前は日山の合字の昆山だぞ、十九番だぞ」

と、淡呵を切つた、竹子には一八の暗號などは少しも判らないが兎に角此の有様を見て大に喜んだ。

「姉さんモウ大丈夫ですから此方へお入來なさい此の野郎は俺しに内股の急所を蹴られて氣絶をして居ますせ」

最早大丈夫と安堵した竹子は。

「はい有難うございます、お蔭様で危い處を助りまして何共御禮の申し上げやうがございません、別段何處もお怪我は有りませんですか」

「え、擦過傷一つも在りませんよ」

「本當に結構でございました、妾しは貴郎様のお倒れ遊ばした時にはどの位心を痛めましたか知れません」

段々心が落ち付いて來たので竹子は嬉しさにニッコリ笑つた「旨いでせう俺しの策略は、何にしろ此の野郎は斬れ物を持って居ますから萬一負傷でもしては損ですからあ、云ふ機轉を利かしたのです、夫れに乗つた此奴が一体間抜けなんですが夫れはさうと姉さんは此の眞夜中に何處へ行くのです、眞逆かお宅から此奴に

連れ出されたのでは無いでせう」

「はい……」

と、帝都劇場を出てからの概略を語つて此の附近に住居する松野露子の家を訪づれる事を話すと。

「あゝ左様ですか夫れでは貴女も帝都劇場のお方ですか」

斯う云はれると竹子は一寸返答に詰つたが今の身の上では反つてさう思はせて置く方が得策と思ひ。

「はい……」

と、耻かしさうに頭を下げた。

「さうですか、夫れは危なかつた、俺しは此の山を預かる火消し人足だが松野さんの家なら良く知つて居るから直ぐに案内して上げませう」

「難有うございます、さうして此の人は此のまゝにして置いて宜ろしいのでせうか」

と、怪漢黒坂の方を顧ると。

「斯んな奴は斯うして置いて澤山です、是れから松野さんの家へ行く途中に派出所に届けますから、其の中に息を吹き返して逃げて歸へれば此の野郎が運が強いのです」

流石江戸ッ兒の後には少しも心を残さず、竹子を連れて聖天山を降つた。

（二十八）

江戸名所に名も高い竹屋の渡舟場の浅草に寄つた船着き場附近

に、小粋な二階建に黒塙を廻らし、庭は東方隅田川の岸に沿つて二拾坪ばかりを取つた瀟洒な一構は帝都劇場の花形として満都の人氣を繊弱き一身に集めて居る松野露子の住居であるが、今しも草木も眠ると云ふ眞の夜中に露子の家から年を老つた女中や主人公の露子に見送りを受けて待たしてあつた護謨輪の自用車で歸つて行く四十五六の紳士がある。

「どうも遅いのに難有うございました」

と、露子は家の外まで出て叮嚀に頭を下げたが、心の中に深き心配があると思へ常に活潑なるに引替へて至つて情れ勝であつた紳士は車上から。

「態ざ／＼恐れ入りますなア」

と、軽く會釋をした後ち。

「山田さん……」

露子は自分の本姓を呼ばれたので。

「はい……」

返辭も軽く泥除けの脇に寄つて紳士の面上を仰ぐと。

「何にしろ非常に御衰弱なすつて居らすから貴女も其のお心算で御覺悟をなすつて居なくては不可ませんよ」

「は……はい……」

露子はソツと流れ出づる涙を手の甲で拭つた。

「夫れからモウ喰べたいと云ふ物は何んでも差し上げた方が可い
です」

「は……はい」

と、露子は双眼をしばたいたが此の紳士こそ二十日程重き病

の床に臥す露子の實母梅子の主治醫である、露子は此の婉曲なる
死の宣告は期して居たとは云へ今更の如く胸の動悸の高まるのを
覺えた。

「夫れでは先生、母はモウ逆も不可ないのでございませうか」

「今夜の中と云ふ譯では在りませんが、兎に角あゝ衰弱して居ら
れては回復は十中七八まで六ヶ敷いです、然かし人の命と云ふも
のはさう輕る／＼終るものでも無いですから全治せんとも限りま
せんよ」

「……」

「夫れから御都合で他の醫師に見せ度いと云ふやうな御希望があ
るなら御遠慮無く診せたらどうです」

「いえ先生を御信じ申して居るのですから、先生のお手で全快せ

ぬものなら命數と諦めるより致方がありません」

「本當に御心配でございませう」

と、氣の毒さうに露子の面を眺めた主治醫は。

「夫れから逢はせるお方があるなら今の中にお逢はせなすつた方
が善いでせう」

と、云い置いて歸つて行つてしまつた、後と見送つた露子は女
中に向つて。

「遅くまで本當に氣の毒だわねえ、後どの戸締りは妾しがします
から眠すんで下さいよ」

と、女中にまで氣兼ねをして居る露子は悄然と奥の八疊に病軀
を横たへて居る母の枕許にシヨンホリ坐つた。

「松子や……」

瘦せて糸のやうになつた手を差し延べた母親の梅子は露子の本名を呼んで。

「あの時に親子の名乗りをしなかつたのが心残りだが、何んとかして一目竹子に逢つて行く處へ行き度いよ」

「母アさん貴女の仰しやる事は良く判つて居ますから明日は妾しが吃度竹子さんを呼んで来て上げますよ」

刻一刻と死の迫つて居る母親の心を安めやうと口から出任せの事を云ふ女優松野露子の胸の中は張り裂くやうである。

(二十九)

娘の言葉を聞いた山田梅子の面には淋しい笑みが浮んだ、自分

は最早死の迫つて居る事を覺悟をして居ながらも寝た間も忘れた事の無い血を分けた娘の竹子！本山男爵家の冷酷に依つて親子の名乗りさへ出来ぬ境遇にはなつて居るが今年の夏の初めまでは男爵家の乳母朝子の情けに依つて娘の消息だけは知れて居た、其の朝子の死後に大磯の海岸で現在自分の産んだ竹子に逢つても男爵に義理を立て心を鬼にして親子の名乗りをしなかつた位心強い女であつた、夜の散歩に男爵家の別荘前を通つて竹子が繼母の浪子から辛い目に逢つて居るのを知つた時も心を鬼にして救いに行かなかつた位心強かつた梅子も今や死は到底逃れ得ぬと悟つては息ある中に唯だの一度でも可いから親と呼ばれ子と呼んで行く處へ行き度いのである、夫れでなくては梅子としては死ぬに死なれねのである。

「松子や夫れは本當かい」
 日頃から氣丈の梅子は心に掛るのは竹子のことばかりである
 見えて、思い出したやうに時を置いて露子に再び問を起すのであ
 る。

「何がです母アさん」

「何がって竹子が此の家へ来ると云ふことは本當かい」

此のいちらしい問を受ける度び、身内の瘦せを覺える位である
 が。

「何が嘘を云ふものですか、明日は屹つ度来ますわ」

明日になれば亦た何んとか言い逃れる事もあらうと露子はキッ
 パリ答へた。

「さうかい、彼の子も本當に苦勞をして居るからねえ」

と、嘆語のやうに云つてスヤ／＼と眠つたかと思ふと亦た眼を
 開いて。

「夫れにしても良く御前様が承知をしたねえ、誰れか使いでも遣
 つたのかい」

竹子の事を云ふと衰弱して居るとは思へぬ位に言語が明晰であ
 る、夫れが何より辛らいのであるが。

「實は電話で本山の御前に願いましたら外の事で無いからと仰し
 やつて直ぐに御承知下さつたのですわ」

「あら左様かい、夫れでは明日が楽しみだねえ」

病人は嬉しさうに微笑を浮べ。

「お前もモウお寝よ、私しも明日を楽しみに善い夢でも見るから」

「はい、さう致しませう」

口では何気無く斯う云ふが、松野露子は此の二三日前から新聞を見て居るので今や妹の竹子の身の上の如何なる事件が起つて居るか云ふことはチャンと知つて居る。

「あゝ何んと云ふ情け無きことだらうかね、現在血を分けた二人しか無い姉妹が同じ東京の市中に居ながら産みの母親が息を引取るといふ場合に逢つて別れを告げる事が出来ないばかりか公然親子姉妹の名乗りさへ出来ないとは……」

と、心の中に世の味気無さを泣くのである、さうして彼の女は「二層のこと本山様へ行つてお頼み申して見やうかしら……イヤ……止めやう……どうやら奥様が今まで秘密にしてあつた事に就て竹子さんに辛らく當るやうだから」

思ひは千々に亂れて、頭さへツキン／＼と痛み出した、折り柄

我が家の門口で。

「モシ山田さん、一寸此處を開けて下さいましモシ松野さん……」

と、本名と藝名の二つを呼んで表の戸を叩く男がある、さうして其の傍らで頻りと禮を述べて居る女の聲さへ手に取るやうに聽えるので松子は思はず寢床の上に俄破と刎ね起きた。

(三十一)

寢床の上につき直つた松子は耳を澄まして女中の起きるのを待った。

「もし一寸此處をお明け下さい、お客様をお連れ申しましたから」

女中は宵からの疲勞にグッスリ寢込んで起きる様子が無い。

「はい……」

と、返辭をして起ち上つた松子は急いで出て行つたが玄關の中
から表の様子を窺ひ乍ら。

「誰何でございます」

と、聽いて見ると外から男の聲で。

「俺つちです、町内の辰です」

「あら辰頭ですか……」

「え、お宅を探して居る姉さんをお連れ申しました」

「あら左様ですか、どうも済みませんことねえ、今直ぐに明けま
すから一寸待つて頂戴」

流石家業柄である、愛想好く返辭をして土間へ降りたが今時分
自分を訪づれる婦人は何者であらうと松子は大なる疑問を抱いた

「どうもお待たせ申しました」

と、ガラッと戸を明けるど。

「姉さん此方です……」

辰頭は連れて來た婦人に斯う云つて案内の役を済ませ。

「夫れでは俺しは御免を蒙ります」

と、云ひ乍ら急に氣が付いたと見え。

「時に山田さん、此の姉さんをお連れ申して來る前に飛んでも無
え事があつたのですが幸ひに俺しを通り合してお助け申して來ま
した、悉しい事は後とで聽いて下さい」

「あら左様ですか、どうも種々難有うございました、何れ夜が明
けましたらお禮に伺ひます」

と、一禮を述べた松子は辰頭の後ろに頭垂れて居る婦人を透し

て。

「さア貴女早くお入りなさいまし、妾が松野露子ですから」
藝名を告げて家の中へ入るべく促したのは近頃自分の名を慕つて弟子にならうと訪問する婦人が多いので矢張り其の一人と思つたのであつた。

「はい難有うございます、實はお目に掛つて是非伺ひ度い事がございますものですから」

と、告げた婦人は言葉を重ねて。

「モツと早く伺ふ心算りでございましたました處途中で手間を取りましたものですから斯んな時分に参りまして相済みません」

と、自分の前に出て來た其の婦人の面を眺めた松子は反り返る程驚き。

「アッ……」

と、叫んだが我れを忘れて其の婦人の手を取り。

「おうお前……」

と、まで口に出たが辰頭が居るのに気が付いたと見え。

「貴女は確に此の夏太磯でお目に掛りましたお方でしたわえ」

如何して來たのであらうと松子は母が今や死に類して違ひ度がつて居る其の婦人が不意に來訪したのであるから唯だ呆氣に取られるばかりであつた、辰頭は氣が付いて見ると自分の連れて來た此の婦人が松子と瓜二つであるのに少からず驚いたが、松子の態度を見て早くも何か深い事情があると思ひ。

「夫れでは俺しは是れで自分の役が濟んだから御免を蒙ります」

「あら左様でございますか夜更けたもんですからお茶も上げませ

んで相濟みません、何れ明朝お宅へお禮に出ます」

「そんな心配は要りません」

と、辰頭は戻つて行つた、松子は初めて我れに返つた。

「兎に角お入りなさいまし、實は妾しも貴女に是非逢いたかつた

のですよ種々お話しがあるのですから早く上つて頂戴ね」

と、云い乍ら松子はハラ／＼と涙を流した。

(三十一)

奥座敷へ案内された竹子は初めて気が落ち付くと共に現在自分の前に在つて居る此の人が血を分けた姉だと思ふと忽ち涙に暮れるのであつた。

「不意にお宅へ伺ひましたは種々仔細がありますのですが實は貴女にお目に掛つて是非お伺ひ申し度いことがございまして」

と、前置きをして彼の乳母の朝子が死亡以來今日までの出来事や今夜の災難まで落ちも無く語つた後ち。

「左様云ふ譯でございすから、失禮乍ら貴女が妾しのお姉様でございすすなら唯だの一言でも可いのでございすすから姉妹の名乗りをなすつて下さいまし」

と、泣き崩れてしまつた、松子は之れを聽いて稍や暫くは沈黙に耽つて一語も發する事は出来なかつたが双の眼からは竹子と同じやうに熱い涙が頬を傳つて膝頭へホタリ／＼と落ちて居る……落ちた涙は其の衣類を通して肌さへも犯して居る！

「よく釋ねて下さいましたわね」

と、松子は竹子が自分を尋ねて帝都劇場へ赴き母が病氣と聽いて夜更を厭はずに尋ねて来たのが何の位嬉しかつたか知れないと同時に危い災難に逢つたのも結局は自分親子に一刻も早く逢はうとした爲めと思ふと其の心根をどの位頼母しく思つたか知れない、また先刻からの話を聽いて番町の屋敷に居る浪子夫人に對しては自分の母が今のやうな身分を思ふに付けても現在血肉を別けた妹の竹子を夫れほどまでに虐待するかと思ふと勝氣の松子は。

「迂奴ッ……如何するか見ろッ……」
と、心の中に絶叫して無念の拳を握るのであつた、そんな事とは知らぬ竹子は膝を進め。

「もし貴女……唯今も申し上げる通りでございます、御重病に居らつしやる貴女のお母アさまが妾しの察しの通りでございますな

ら御看病をさせて下さいまし、さうして一言でも母ア様と呼ばせて下さいまし、お頼みでございます……お願ひでございます、本山竹子が一生のお願ひでございます……若し貴女、ね、ね……此の通りでございます」

手を合せて縋り付いた時に松子は。

「竹子さんッ……」

我れを忘れて緊つかと抱き寄せ。

「あ……妾しだつて唯つた一人の妹……何時お前と姉妹の名乗りが出来るかど、夫れのみを樂しみにして居たんだわ餘義ない義理で母ア様も妾しも現在お前が此の東京に居るのは知りながら、世間晴れて逢ふ事も出来ずに居た妾し達の辛らさも竹ちやん察して頂戴よ」

「えッ……」

と、絶叫した竹子は初めて自分の心が届いたので。

「夫れでは矢ッ張り、ね……姉さん……」

と、息を喘ませながら。

「で御座いましたか」

「サッと覗き込む竹子の面を同じやうに瞋めた松子は抱いた手を離さうともせず。

「あ、左様だわ、竹子さん本當に妾しも逢いたかつたわ」

姉妹二人は暫し互に骨も砕けよと抱き合つて居たが漸く手を放した松子は。

「竹子さん……母アさんもお前に逢い度がつて居るのだわ」

と、今度は母の病氣が到底全治の見込みの無い事や數日前から

死ぬ前に一度でも宜いから親子の名乗りをしたいと自分に迫つて居る事を話すと。

「そ……そうでございますか……」

と、返辭をして竹子は今は一刹那も早く母に逢ひ度いのであつた折り柄間を隔てた彼方から。

「松や……松子や……」

と、力の無い聲が洩れて來た。

「はい……」

松子は勢好く返辭をしてバツ／＼と驅けて行つた、夜は既に明けたと見えて戸の隙きが白み渡つた、鐘ヶ淵紡績で吹く夜勤交代の氣笛がホーと隅田川を渡つて鳴り響いた。

(三十一)

母の病室へ駆け込んだ松子は容易に戻つて來なかつた。

「どうなすつたのだらう、母ア様の具合でも悪いのではないかしら」

竹子は姉と初めて姉妹の名乗りをした嬉しさも今は悲しき思ひ出の種となる第一歩であると思ひ乍ら奥座敷の様子に耳を立てたするとハタ／＼と走せ戻つた松子は。

「竹ちゃん……」

と、ニツコリ笑つて入つて來て、竹子の脇に座り。

「母アさんにお前さんの來た事を申し上げたわ」

「あら左様ですか、さうしたら母ア様は何と仰しやつて姉さん……」
竹子は姉が少しの別け隔ても無く眞の姉妹らしき態度が嬉しいのである

「直ぐに逢い度いと仰しやるんだわ」

「あら左様ですか姉さん……」

竹子は嬉しさの餘り我れを忘れて立ち上ると松子は。

「あら竹ちゃんも妾しと同じで馬鹿に氣が早いわねえ」

と、笑ひ乍ら其處へ座り。

「お前さんが母ア様に逢ふ前に注意して置くが決して番町のお屋敷の有様をお耳に入れないやうにして頂戴よ、どうせ先生は助からないと云つて居るのだから死んで行く母ア様に餘計な心配はお爲せ申し度くないからわ」

流石に幼少から苦勞をして居る松子は萬事に氣を配つて居る。「だから何んでも妾しが電話を掛けて本山の御前様にお願ひ申してお前さんが當分看病に來たやうにして置いて下さいよ頼みますから」

と、云つてホロリと涙を落した松子は。

「夫れからねえ竹ちやん」

松子は何を思つたのか不意に妹の手を緊り握つて。

「妾しにも少し考へがあるから母ア様と親子の名乗りをしたら當分自宅に居てお呉れでないか……」

と、言葉を切つた後ち。

「夫れから親の死ぬのを待つのでは無いけれども萬一の事があつた後ちはお前さん一人位氣樂に遊ばせて置くから決して屋敷を扱

け出して來たと云つて短氣な真似をしてお呉れでないよ、之れは妾しが姉として必つと頼んで置くわ」

自ら家を出て自分達親子に逢いに來た後ちの竹子は如何なる考へに在るか位は疾うに見透して心から妹の輕舉を戒めた。

「は……はい……」

姉の炬眼を恐れた竹子は。

「決して短氣などは起しませんから姉さん御安心を遊ばせよ」

「夫れなら可いけれどもお前さんのやうに未だ世の中の事を本當に知らない人は詰らない義理立てや、一寸した耻かしい事で生命まで捨てる人が世間に随分あるから餘計な心配をするんだわ」

姉は云へ年齢から云へば自分と同じであるのに如何して斯う先きから先きまで氣が付くのであらうと竹子は反つて耻かしくも

あり頼母しくもあつた、さうして今は姉の親切なる言葉を唯一の頼りとして、死ぬうと覺悟した自分の早計を悔んだ。

「大丈夫ですわモツ世の中に少しも恐ろしい者や怖い者は在りませんから」

妹が心から自分を信頼するのを見極めた松子は漸く安堵の胸を撫で下ろし。

「夫れでは母様の處へ行きませう」

と、松子は力無く起ち上つた。

「はい……」

姉と共に起ち上つた竹子は初めて母と親子の名乗りが出来るかと思ふと、徒らに胸の動悸が高まるのみであつた。

「さア竹子ちゃん遠慮せずに早くお入り」

(三十三)

先きに立つて母の病室へ入つた姉の松子は入口に座つたまゝ、雨の手を突いて頭を下げた竹子に向つて少しも氣の置けぬやうに促した。

「は……はい……」

姉から氣を置けぬやうに聲を掛けられた竹子は今しも片時も忘れ得なかつた實母の病にやつれた姿を眼の前に眺め。

と、返辭だけはするものゝ何んと無く氣遅れがして入り兼ねて居ると。

「竹子さん如何したの……？母アさんも貴女の來るのを待つて居

らつしやつたのだから、早く此方へお入りなさい」

「はい……」

今は心を決して病み疲れた母の枕邊に寄り添つた竹子は。

「お母ア様ッ……」

と、我れを忘れて其處へ泣き伏すと、頭を掻げた母親の梅子は

「おう……」

と、瘦せて糸のやうになつた手を差し延べて竹子の右の手を握り。

「モ……もつと此方へお寄り」

と、淋しい笑みを洩らし。

「竹子さん、嗚ぞ今日までは私しの心強いのを怨んで居つたらうねえ」

母親から斯う云はれると竹子は感極つて何んど返辭をして可いのか格好の言葉さへ出ないのである、母は苦るしさうな息を吐いて、握つた其の手に力を籠め。

「竹子さん、先達て大磯で逢つた時には本山家に義理があるから態ざと心にも無く餘所くしく爲て居たのだから悪く思つてお呉れで無いよ」

モウ是れ丈け聴けば後とは何にも聴くに及ばないので、竹子は突然り母の身体に縋り付いてチツと其の面を覗き込み。

「ッ……夫れでは貴女は……」

と、流れ出づる熱涙を拭はうともせず。

「母アさんでしたか」

「ッ……竹子ッ……」

群と抱き寄せたまふ、母は身に病在るのも忘れたかの如く。

「本當に大きく成りましたねえ」

美しく成長した我が娘の姿を飽かず眺めて居た、竹子は爰に豫ての希望が遂げられて親子の名乗りをしたのが此の上も無く嬉しかったが、其の慕かきしき母親が明日をも知れぬ大病であると思ふと、不如意なる人生を悲しむ熱涙が留め度も無く頬に傳はるのである。

「竹子ッ……」

病苦を堪へて我が娘の兩手を緊つかと握つた母の梅子は。

「何事も運命と諦めなければ不可ませんよ、姉さんの様に立派に男爵の胤に生れ乍ら舞臺へ出て居る人さへあるのですから」

此の一言を聴くと傍に聽いて居た姉の松子も堪らなくなつて。

「アッ……」

と、其の場に泣き伏してしまつた、其の様子を眺めた母親は。

「松子ッ……決して泣く事はありませんよ、今も云つて聴かせる通り何事にも人は定つた運命に従ふより外は無いのですから」

と、云つてホット溜息を吐き。

「夫れにしても御前様は、良くお前を私しの家へ寄越したねえ、嗚ぞ奥様が反對をなすつたらうにねえ」

と、云ひ乍らあらぬ方をチツと眺めて居た母親はどうしたのかウーンと苦しむさうな呻きと共に床の上に悶絶した。

「あれッ……」

姉妹二人が此の有様に驚愕して扶け起すと母は無念の齒を喰ひしばつて居た。

(三十四)

拾餘年目で始めて親子の名乗りをした、山田梅子は心強いとは云へ流石に婦人である、今は明日をも知れぬ重き病の床に臥して居て、姉の松子や妹の竹子の將來を想到して遂に痙攣を引き起したのだ。

「竹子さん、早く其のお薬りをッ」

斯んな事は何度も在ると見えて、松子はさのみ驚かすに傍らの薬瓶から醫師の置いて行つた氣附け薬を飲ませた。

「あゝもう可いよ、姉妹のお世話になるもモウ長い事は無いよ」
氣の附いた母親は直ぐに斯んな悲しい事を云つて淋しい笑みを洩した。

洩した。

「あら何んでございますねえ母ア様、そんなお氣の弱いことを仰しやるものではありませんわ、先生も左様仰しやつて居ますわ、モウ少し陽氣が順調となればズツ、快い方に向いますつて……」
「いくら先生がさう仰しやつても私は今度は逆も快くならないと覺悟を極めて居ますよ、然かし斯うやつて竹子とも親子の名乗りをして置けば後とに少しも思ひ残す事は無く行ける處へ行けます」

ど、淋しい笑みを浮かべ。

「夫れから松子は相當の財産も出来て居るから此の先きに喰べる事の心配は無いが唯だ心残りなのはお前さん達二人が此の先きです、どうを互に仲好く暮らして下さいよ」

「そんな御心配は御無用ですわ、假令世間で何んど云はうとも二人は切つても切れぬ姉妹ですから一生睦まじく暮らしますわねえ姉さん」

「さうですとも、母ア様決してそんな取越し苦勞はなさいますなよ、妾しも竹子も血を分けた姉妹ですもの何んで仲悪くなるやうな事が在るものですか」

母親の梅子は我娘二人が此の睦じき言葉を聽いて安心したと見え。

「夫れを聽いて安心したよ、夫れからお前さん達は彼のお朝さんのお墓参りは忘れずにお遣りよ」

其の言ふことは何れも遺言めいて居るので二人の姉妹は心の中に悲しく思ひ乍らも殊更に氣を取直して。

「畏りました決してあの人が蔭になり日向になつて妾達に盡して呉れたことは忘れません」

「さうかい夫れで私しはモウ何も思ひ残すことは無いが竹子は何時お邸へ歸るの……早く歸らなければ不可ないだらうねえ」

竹子は此の質問に對して直ぐに返答が出来無いので黙つて頭を垂れてしまつた。

「……」
「ねえ竹子今日お歸りかい」

すると姉の松子は膝を進ませ。

「母アさん竹子は何日まで我家に居ても可いのですわ、歸り度くなる迄我家に居ても可いと男爵が仰しやいましたわ」

「あら左様なのかい……」

母親はさも嬉しそうに初めて快心の笑みを洩らしたが松子に命じて座敷の障子を明けさせてテツと隅田の流れを眺め。

「人の身は矢張りあの水のやうだねえ」

と、何を感じたのか暫く河面を熟視して居た、さうして朝食は親子三人睦しく母の枕下で喫し終つたが、姉妹は尙ほ母の枕邊に附き添つて四方山の世間話に母の氣を引き立て、居た、すると正午も過ぎて世間が漸く黄昏れる頃。

「松や……ッ……竹や……」

と、苦るしうに姉妹を呼んだ梅子が何か云はうとしたがモウ舌が釣つて、出る呼吸のみ急となつた、旋がて咽喉のあたりがゴロ／＼と妙に鳴つたを最後として薄命なる山田梅子は娘二人の手を握つたまゝ、遂に歸らぬ旅の途に赴いてしまつた夫れと知つた二

人の姉妹は。

「ワッ……」

と、其場に泣き倒れてしまつた、河面を東に渡つて葛飾方面の時へ急ぐ夕鴉の聲が悲しい。

(三十五)

母が息を引取つたこと知つては姉妹は今更らのやうに世の味氣無さと、人生の淋しさを感じた、漸く涙の面を上げた松子はキツ度心を取り直して。

「竹ちゃん何時まで嘆いて居たとして仕様が無いからお葬式の仕度をしやう」

「はア……」

ど、返辭はするもの、竹子は宛ら氣拔けがしたやうで立ち上る勇氣も無い。

「でも姉さん、斯うやつて長のお別れになる以前にお母さんと呼ばして頂いたのは本當に嬉しいわ」

ど、切めてもの慰めにして居る竹子の心根を察した松子は。

「妾しも夫れを思ふと皆んな神様のお引き合せだと思ふよ」

ど、二人は手を取り合つて涙に暮れて居る處へ町内の世話人が急を聽いて駆け付けて来た。

「本當にお世話甲斐が無くて嘸ぞお力落しでございませう」

他に親類の無い松子の悲嘆を察して悔みに來た人の方が涙に咽んで居る。

「あの松子さん、今頭の辰さんも参りますが御用が在りますなら何んでも仰しやつて下さいまし」

「種々難有うございます、御存じの通りの身の上でございませうから何分宜しく願います、何分にも少しも勝手が判りませぬので」

ど、松子が頭を下げて頼むと竹子も共に手を突いて。

「お初にお目に掛ります、姉が毎度お世話になりましたして難有うございませう、何分にも女のごことで少しも様子が判りませぬから宜しくお頼み申します」

「委細承知しました」

ど、月番になつて居る町内の世話人は至極親切に世話をし知らせる處へて洩れなく通知を發して其の夜は帝劇の樂屋の者など多勢寄り集つて通夜をなし其翌日は盛んなる葬式が營まれた、さ

うして葬式が済むと松子は集つた香奠に悉く母の名前で区内の貧民屈へ恵んでしまつたが儲て喪事滞り無く式を済ませ世話になつた處へは落ちも無く心ばかりの禮を済ませて、初めて何も彼も済ませてしまふと何んもなく世の中が淋しくなつた今日も今日とて初七日の佛事をせんと菩提寺に母の墳墓を参詣して家に歸つて来た二人は、母の位牌の前に座つて。

「ねえ竹子さん本當に淋しいねえ」

「本當ですことねえ、妾しは何んだか夢のやうですわ」

と、二人は互に差し向ひになりさへすれば必ず亡き母の噂に涙に暮れるのみである、すると松子は。

「今日は竹子さんと少し相談があるのだからお前さんはどうしても番町へ歸らない心算りかい……」

「はい、母の亡くなつた事は新聞にも出て居ますから知つて居るのでせうに何んにも云つて來ない處を見ると妾しの家出をしたのも結局幸にして居るのでせうから」

「さうねえ……」

松子も豫てさう思つ居たのであるから。

「妾しも實は幾ら何んでもお前さんの居るか居ないかと云ふ様子位見に來るだらうと思つて居たわ」

と、云つた後ち松子は膝を進めて。

「夫れで相談と云ふのは外でも無いが、まだ良く聴かなかつた番町の様子も聴かせてお呉れ妾しにも少し考へがあるのだから姉さんには何も彼も隠くさずに話してお呉れ」

と、質問する松子は此の時大磯以來胸中に決し兼ねて居た或る

恐しい企てを妹の返答次第で決しやうとするのであつた。

(三十六)

姉の問ひに答へる竹子は彼の乳母の朝子が亡き後ちの事を落ちも無く物語つた後ち頼に傳はる熱涙を兩の袂で拭い。

「左様いふ譯けで妾しは敏雄さんに義理が在りますからどうしても邸へは歸るまいと決心して居るのでございます」

と、言葉切つて姉の膝の上にヨ、と泣き伏してしまつた、聽いて居た松子も涙に咽びながら。

「竹子さん、夫れで様子は残らず判つたわ、左様云ふ譯けなら番町へは歸らなくても可いわ、お前さんは妾しの家に居て勉強をし

たら可いだらう、さうして折りを見て妾しがお父う様にお目に掛つて萬事圓滿に解決をして頂かう」

嬉しき姉の言葉を聽いて感謝の涙を流した竹子は。

「ア……難有うございます、何に勉強なぞはしなくも可うございませうから長く姉さんのお傍にお中代として置いて下さいませ、ねえ姉さん妾しは夫れで本望ですから」

「何んと云ふ可愛いことを云ふ人だらうねえ、鬼に角少しも心配せず妾しの處に居てお花の稽古にでも行つたら氣が紛れて宜いだらう」

「はい……」

姉に恐ろしき考へが在らうとは夢にも知らぬ竹子は唯だ嬉し涙に暮れるのみであつた、すると松子は。

「さうと相談が極つたら、モウ悲しい話しは止めにしやう」

と、此の話しを中止して。

「今日は久し振りで竹ちやんと氣を紛らせる爲めに葡萄酒でも飲まう」

「はい……」

姉妹水入らすの楽しい晩餐を済ませると今度は松子が。

「竹ちやん、少し氣晴らしに近い處へ旅行に行つて見ないか」

「え、……」

何事も姉の心に逆らはぬ竹子は之れに賛成して其の翌日は上野の一番で日光見物の旅に上つた、物心を覚えて以來初めて姉と共に徳川美術の精華と云はれる晃山に遊んだ嬉しさは竹子の身に取つてどの位氣を引立てたか知れないのである、さうして華嚴の瀧

や裏見の瀧なぞを見物して姉妹が東京へ戻つて来たのは家を出てから七日目であつた、留守を預る女中にも相當の土産などを與へて松子は留守中の勞を謝した。

「さア今夜は疲れて居るから早く寝やう」

と、竹子を促して臥床へ入つたが翌くる朝は早く床を離れて其の朝の新聞を見て居ると不圖今夜の六時から日比谷ホテルに博愛婦人會の幹事會があると云ふ記事が眼に付いた。

「さうだ、彼の浪子と云ふ方は博愛婦人會の幹事だつた」

と、獨語した松子は何か深い決心をしたやうであつた、が其の日は別に變る様子もなく妹の竹子と共に世間話しに時を移して旋がて日が暮れさうになると。

「竹子さん、妾しは一寸帝都劇場へ行つて來ますからね」

と、云ひ置いて家を出た、が其の時松子は二階へ駆け上つて鏡臺の抽斗から剃刀を取り出し、ハンケチに包んで懷中に忍ばせた

(三十七)

姉を送り出した竹子は別に用事の無い身の上であるから女中相手に面白かりし日光の話しなぞをして夜を更かして居たが此方の松子は家を出ると直ぐに腕車を馳せて亡き母の菩提寺に参詣し何か頻りと祈願を籠めて立ち出でたが今度は帝都劇場へ腕車を走らした。

「車屋さん此處で宜いわ……」
と、云つて神田橋から車夫を歸へした松子は帝都には行かずに

日比谷公園で電車から降りて日比谷ホテルを訪れた。

「入らしゃいませ」

と、玄關に立つて居たボーイが案内をしやうとする。

「あの後だから松野と云つて尋ねて来る者が在りますからさうしたら通して下さいませ」

と、答へて置いて食卓に就いたが誰れも自分を探ねて来るべき人の無いことは判つて居るが松子は他に深い考へが在るのであるから態ざと待ち兼ねた風情で。

「ボーイさんまだ連れは来ませんか」

受持ちのボーイは氣の毒さうに。

「本當にお待ち遠でございませぬえ、まだお見えになりませぬ」
「困つたわねえ」

非常に當惑らしい様子をして居た松子は今は是非が無いと云はぬばかりに。

「夫れでは妾し丈け食事を済まして行くわ」

「誠にお氣の毒様でございますわア」

何んにも知らぬポリーは頻りと氣の毒がつて居たが旋がて、晩食を済ました松子は。

「あの會計を取つて下さいまし」

と、ポリーに命じて勘定を済ませ相當の心付けも遣つた後ち。

「あのポリーさん、今夜は大變貴婦人方がお見えになるのねえ」

「はい今晚は博愛婦人會の幹事會がございまして、皆さんがお集り遊ばして居らつしやるのです……」

「あら左様ですか……」

と、ニッコリ笑つた松子は。

「夫れでは本山男爵の夫人浪子様も御入來遊ばして……」

「はい先刻からお見えになつて居ります夫れに本山様は今月は月番で何か御報告があるので三時頃からお見えになりました」

「おや左様ですか……」

何氣なく返辭をしたのであるからポリーは浪子夫人と交際の在る婦人とも思つたのか、一寸腰を屈め。

「何か御用でも御座いますならお取り次ぎを致します」

「いえ、可いのですわ、唯だ一寸伺つた丈けなのよ」

「左様でございますか」

ポリーは其の儘口を噤んでしまつた、松子は椅子を離れて。

「どうもお世話様でした」

と、云つてホテルを出ると公園の木立に身を潜めて一心に日比谷ホテルの玄関を熟視ながら時を過ぎて居た、やがて時刻が移つて銀座の大時計が十一時を打つた時浪子夫人は多くのボーイに送られて玄関を出たのを眺めた松子は「ヤッ」と駈け出して浪子夫人に近付くと共に。

「浪子さんではございませんか」

自分の名を呼ばれたので浪子夫人が。

「誰何……」

と、振り向く處を出合頭に。

「お恨み申します……」

と、絶叫した松子は隠くし持ちたる剃刀を眞つ向に振り翳して咽喉の邊りに斬つて掛つた、電燈に反映する刃尖きが怪しく光つ

たかと思ふと。

「きやッ……」

と、一と聲浪子婦人は悲鳴を上げた。

(三十八)

消魂しき浪子夫人の悲鳴を聞き付けると今しも待所で仕度をして居た抱車夫は宙を飛んで現場へ駈け付けた、ホテルのボーイや事務員が「ヤッ」と駈け付けて入口に倒れて居る夫人を引き起し。

「ド……どうなさいました」

と、唯だ騒ぐばかりで途方に暮れて居たが浪子夫人の傍にベッ

「は……早く警官をお呼びなさい、犯人は樹立の間に隠れましたから」

心利きたるボーイは警官に急報をすると共に他の人々は浪子夫人を扶け起して奥まりたる一室に運び入れて負傷の手當をする。幸にも加害者の手許が狂つたものと見え夫人は右の耳の下へホンの僅かな傷を受けたばかりであつたが其の刃物は餘程鋭利と見え衣類は御召のコートは勿論羽織から上着までスーツと縦て引いて斬り付けてある。

「まア本當にお仕合せでした事、奥様お負傷はホンの僅かでございますからお氣を確になさいませ……」

と、意外の出来事に驚き騒ぐ貴婦人達は頻りと浪子夫人の氣を

引き立て居る、漸く我れに返つた浪子夫人は駆け付けた醫師が縫帶を濟ますと。

「皆さま種々御心配を掛けまして相濟みませんでした」

と、何氣無き体で挨拶をしたが其の美しくしき面は宛ら死人のやうに蒼白であつたさうして夫人を取り捲く多くの者は。

「奥様一体加害者は何者でございますか、お心當りが在りませんか」

「……」

浪子夫人は何故か此の問には答へずに。

「あの濟みませんがボーイさんお冷水を一杯頂戴……」

と、此の質問を紛らそうとして居ると玄關から浪子夫人を送り出したボーイが。

「兎に角加害者が年若な美人であつた事は私しが確に認めましたさうしてあの婦人は先刻まで當家に居て晚餐を食べて歸つた客なのです」

「あら左様ですか」

多くの婦人連はまた一しきりガヤ／＼騒ぎ出したが此の時四五人の新聞記者と二人の警官は此の騒ぎを聴いて駆け付け一行でも餘計に特種を得やうとする記者連は互にボーイを取り圍んで事件發生當時の事を手帖に書き取つて居る。

「どうぞ御用の無いお方はお引取りを願ひます」

と、云つて警官は浪子夫人を階上の喫煙室に連れ込んでしまつたので他の貴婦人は。

「何れ明日お見舞に伺いますわ、どうぞ御大事に遊ばせ……」

と、云ひ置いて各自の家路を差して歸途に就いてしまつた、此の有様を彼の木下間から眺めて居た松子は。

「あゝ遣り損つたか」

と、悲憤の涙を流したが。

「夫れではモウ一度油断を見計つて本望を遂げやう、夫れには暫く妻を隠くさなければならぬが如何したもんだらう」

暫し思案に耽つて居たが、旋がて一人何か首肯いて公園を出で折り柄空らを曳いて來た腕車に乗つて新橋停車場へ急がせた、此方の警官は浪子夫人に向つて一應慰藉した後住所氏名を聞き取り最後に言葉を改めて。

「夫れから夫人には加害者が何者であるか御心當りがございますか」